

慈しみの島ーフィリピン・マクタン島 (その一)

ゆとろ 漫

一 悲劇は消えることはなく

羽村右京は、「あつ」という大きな声で目が覚めた。声は自身のものだった。彼は最近何者かに追われたり、不審者と格闘する夢を見ることが多かった。彼が気づかないストレスがあるのかもしれない。彼は目をしばたたきながら周りを見渡す。いつもの寝室の風景とは全く違うのだ。彼は一瞬呆然となった。そして何かしら得体の知れないものによって拉致され、押し込められてしまったのかとも思った。その思いが恐怖を生み出し、彼を包み込んだ。思わず彼は「ここはどこだ」と、声を出した。その声が、目覚め

たばかりのぼんやりとした脳をわずかに活性化させたのだろう。意識が明瞭になった。改めて部屋の中をぐるりと見渡した。彼の脳はようやく正気づいた。

「そうだ、フィリピンのマクタンにきているんだった。純ちゃんの別荘だった」

そう得心すると落ち着きを取り戻した。同時にいつに無く取り乱す自分を情けなく思った。すると彼の耳に鈍く錆びついたブーンという音が飛び込んで来た。エアコンの音であった。このエアコンは十年前に家を建てた時に設置したもので、冷房機能は極度に落ちている。落ちていてもモーターの音が高くても熱帯の夜の暑さにはわずかの機能

でも頼みにせざるを得ない。その不足分を補うというのだろうか、エアコンの回転音は逆に高くなっている。高い音は眠りの妨げになるはずなのだが、健康な右京は当初こそ気にすることがあっても、いつしか寝入ってしまったのだった。カーテンの隙間から強く、鋭い朝日が差し込んでいた。もう六時とはつくに過ぎている気配である。

彼は起き上がると、ベッドの上に尻を落とした。延ばした足先にくしゃくしゃと丸まったシャツが転がっている。どうしてこんな状態になるのか不思議なほどである。勿論

シャツよりわずかに厚い掛布団もシャツ同様な状態である。彼は半袖Tシャツに短パン姿で寝ていたのだが、シャツは汗でぐつしよりとなっている。厚いカーテンを通してオンドリのひと際高い声が届く。この別荘の南側は百坪四方ほどの空き地となっている。熱帯である。空き地は雑草や樹木でびっしりと埋め尽くされている。五年ほど前にパイソン

ンらしき大蛇がとぐろを巻いていたと、今も語り草になっている藪地である。人の行きかうざわざわとした音、ひっそりなしに響くクラクションの音が混じり合い部屋の中に飛び込んで来る。腕時計を見る。やはり六時を二十分ほど過ぎていた。日本の時刻では午前七時二十分である。その時刻を思ったら右京は急に眠気が消えてしまった。自宅であつたら着替と洗面を終え、掃除と洗濯を始めている時

刻なのである。「どうりで外の喧騒が飛び込んで来るはずだ」。右京はウンウンと言いながら一人で納得顔をした。この地、マクタン島は朝が早い。五時ごろには道が通勤の人々にぎやかになっている。一日の中でも一番人の動きが多く、せわしない時間帯なのである。その喧騒を含んだ朝の空気が右京の寝室を包み込んでいたのであつた。

カーテンの隙間から朝日とは言え、厳しい日光が差し込んでいる。厳しいだけではない。たつぷりと熱を含んでいる。「今日も暑くなるのか」そんな思いでその光線に目をやつた右京の両肩辺りがビリビリとした。昨日一日だけのダイビングですっかり日焼けしてしまったのである。そんな焼けた肌を右京はボンボンと手のひらで叩いた。叩くとキュツと尿道がしぼむような快感が走った。下半身がによっこりと持ち上がるのが分かった。

「壮年羽村右京、元気はつらつ今日も頑張ろう」と、ひとり呟きながらびよんとベッドから降り、立ち上がった。

右京は同僚で友人の木暮善波と一緒にスキューバ・ダイビングに來ているのだ。「善波」という言葉は珍しい。仏語に起因するものと思われがちである。彼の父親は「息子の善性を信じ、それを世に広く行き渡る」ことを願って命名したという。

善波の寝室は隣りである。耳を傍立てるが何の物音も

聞こえない。名の通り折り目正しく、几帳面な善波である。彼のルーティンからするととつと起床しているはずなのである。

「さすがに昨日の昼夜のダイビングで疲れ果て、寝過ごしているのか」

右京はぼそつと呟いた。

彼らは昨日、日中二本、ナイトダイビング一本の計三本潜ったのである。右京四十八歳、善波四十二歳の働き盛りである。これをもじって彼らは「ダイビング盛り」と自賛していた。

右京のひとりごとが善波に届いたはずはないのだが、すぐに「トントン」というノックの音がし、それと同時に「善波です」という声が届いた。寝起きの後とは思えない明るく爽やかな声であった。

「どうぞ」という右京の声に「失礼します」という声と共にドアが開き、善波が部屋に入ってきた。それを見た右京は驚いた。彼はすでに着替えていたのだ。清潔感いっぱいのスカイブルーのTシャツに真っ白なジョギングシューズ、そして濃紺のパンツ。グラビヤ誌から飛び出したようなきつちりと決めた服装であった。

「散歩してきましたよ。今日も南の島の空はゼンカイ、キンキンの天気です」

右京は肩を回したり、手の関節を振ったりしながら正直に自分の状態を話した。

「このポイントはショップ前の船着場から四十分ぐらいの所にあるみたい。近い分日程にも余裕があるので船上でのランチを楽しみましょう。私もちよつと疲労が蓄積しておりますから」

善波は朝から饒舌である。「疲れた」と言ったのは右京の心を軽くする彼一流の配慮なのは明らかだった。右京は良きパートナーを持ったと気持ちが軽くなっていくのを感じた。

「『ブリーフィング（潜水前の打ち合わせ）は船上でやることにしてとりあえずアミーからダイブの日程を聞き、その後ランチの食材の買い物をして』と、デイノからタベ遅く連絡があったよ。何やら会議が入ったらしい」

そういうと右京は着替えをした。着替えと言っても短パンを履き替えるだけであった。洗濯が面倒な右京は毎日着替えるべき下着類を一日おきとか二日おきにしていたのである。

「今日は九時ごろ別荘を出て近くの市場で食材を買い船で料理をし、船上で食事という予定らしい。午前、午後各一本ずつのダイビングでのんびりと潜ろうよ」

「のんびり」という言葉が右京の心に沁みこんでいったの

昨日のダイビングの疲れなど少しも見えなかった。筋骨隆々の四十二歳である。四十八歳、華奢な右京とはそもそも体力が違うのである。「寝過ごした」などという言葉は微塵もなかった。それどころか「散歩」までし終えているというのである。右京は「イヤー参った」という言葉をぐつと飲み込んだ。そして「おはよう、随分元気だね。さすが若大将」と声を掛けた。「若大将」とは彼の職場でのニックネームなのである。

「今日のダイビングポイント（潜る位置）はゼロ戦ポイントですね。インストラクターはデイノでサブ（補助インストラクター）がアミーです。墜落した飛行機がどういう状態なのかちよつとワクワクです。ところで右京さん、体調はどうですか」

善波の言葉からは少しも疲れが見えない。それどころカリズム感のある軽やかな口調である。一夜では疲労が消えない右京は善波のスタミナ、若さを羨んだ。

「昨日が昼夜合わせて三本（ダイビングの回数）で、さすがにちよつと疲れているよ。だけど大丈夫、今日のダイビングも楽しむよ。しかし善ちゃん元気だね。今日のポイントはデイノが配慮してくれたみたい。それで近場のゼロ戦ポイントを選んでくれたらしい。善ちゃんには物足りないかもしれないけど今日も楽しもう」

か右京の体内時計の針の進み方がゆつくりとなっていた。

デイノとの付き合いが深まるにつれ右京と善波のダイビングは予定もその場、その時の気分で変えていた。それは船（ダイビング専用のバンカーボート）を借り上げて彼ら専用に行っているからこそできることでもあった。その分、ダイビング料金は通常の二倍ほどした。日本円でいうと二人で三万円ほどである。しかし、送迎付きの伊豆辺りのダイビングは一人二万四千円ほどである。それを考えるとむしろ安いと言えるのである。ものは考えようである。

「そうですね。マクタンに来てちよつと中日、折り返し点です。マクタンの思い出としてマンゴー、マンゴースチン（フルーツの女王とも）、パイナップルなどは是非購入したいですね。できたらドリアン（匂いがきついフルーツの王様とも）を旅の土産としてしっかり食べたいですね。また、サンミゲル（フィリピン産ビール）も忘れないようにしなぐちや」

善波の胃腸は絶好調のようであった。船上での煮炊きは船のスタッフたちがやってくれる。ダイビングの客数やダイビングポイントの遠近にもよるが、船のスタッフは船長を含めると四、五人である。スタッフたちは親子、兄弟、親族という関係である。右京たち二人に対し四、五人という人数は多い。必然ダイバーに対する対応も手厚いものに

なり、至れり尽くせりの「殿様ダイビング」と言われる原因を作っている。

「それじゃデイノとはシヨップで落ち合うということですかね」

「基本そうらしいが、会議が早く終われば一緒に市場へ行くと言っていたよ」

「ああ、分かりました。それじゃアミーが来ましたらまた詳しく話しましょう。ああつ、そうだ、コリーが朝食を作っていましたから。彼女『温かいうちに食べて』と言っていましたよ。それでは食事の時に」

善波は軽く頭を下げると部屋を出て行った。右京にはその足取りも軽やかに見えた。

「今朝はこれまでの朝とは違いゆっくりとした日程だ、溜まった汚れ物の洗濯をやるう」

どうやら善波の活力が右京に移ったようであった。彼は屋外にある洗い場に向かった。芝生で敷き詰められた庭は百坪ほどある。道路や隣家の境はブロック塀で囲まれている。それらの境界にはマンゴー、パパイヤ、バナナの木が植樹されている。右京の好きなパイは六げほどの大きさになっている。先端から数十本の細い枝が放射線状に張り出され、その根元には十個ほどの実がかたまつてぶら下がっている。まだ青く、熟するまでは二カ月を要するよう

が右京に話しかけて来た。

「昔、太平洋戦争の時、日本兵がオランゴ島に侵攻して来て島を占領・支配したんだ」

「えつ、そんなことがあったんだ。レイテ戦やマニラの戦闘は知っているけど、こんな平和な島まで日本兵が攻めて来たのか。いやあ、そんなことがあったなんて知らなかった。勉強不足でご免」

「もう、昔のこと。今は友達」

「だけどその占領の時何か問題があったんでは」

突然デイノが言い出したのには訳があるに違いない、と右京は推測した。

「その時、日本兵が赤ん坊を銃剣で殺したりしたんだ。このことは歴史の教科書にも載っている」

デイノはしばしの沈黙の後に苦し気に話した。そしてその表情には何か後悔めいたものが浮かんでいた。

デイノの言葉に右京は茫然となつてしまった。「まさかそんなむごいことがあった」などとは露知らなかったのだ。「日本兵が子どもまで手に掛けた」という事実も恐ろしいことであるが、それを知らずに今日まで生きて来たことが恥ずかしく、そして申し訳なく思い、心が沈み込んでいく右京であった。

「昔のこと、今は問題ない。それに日本はフィリピンの道

だ。ロープを張った干場にはすでに洗濯物が干されていた。それを眺めながら右京は朝が早く、仕事に忠実なコリーらしいと思った。

鴨下純一郎の別荘では雑用には地下水、料理や飲用には売水を使用している。庭を二畝も掘れば地下水が湧いて来る。しかし、サンゴ礁から出来ているこの地マクタンの地下水は、塩分を含みとても飲用水に適さない。洗濯はこの地下水を使用しているが、塩分を含んでいるため石鹼類の泡立ちが悪く汚れも落ちにくい。したがって洗濯の回数が進めば進むほど洗濯物の白地は灰色になり、その色を濃くしていく。

「仕方がないな、楽しんだ分何かしら見返りはしなければ、楽あれば苦ありと言うからな。とにかくあまり気にしない。楽しもう」

右京はそんなことを頭に浮かべながら「よつこらしよ」と言いながら盥の前に腰を下ろした。その途端、

「あつ」

と、思わず右京は声を上げてしまった。昨日最後のダイビングを終えてシヨップで機材（ダイビングをするための用具。マスク、レギュレーター、BCD、ウェットスーツなど）を洗い終わり、シヨップの椅子に座りながら出されたコーヒーを飲んでいる時であった。隣に座っていたデイノ

路、橋の建設に大きな資金と技術援助をしてくれた。特にセブとマクタンを繋ぐ橋は「日本・フィリピンの平和の橋」と日本の援助を称える碑を建てている。みんな日本に感謝をし、日本人を歓迎しているよ」

確かに日本及び日本人に対する好感度は高い。しかし、本当の友好は歴史の暗部をも認識してこそ本物になるということを右京は改めて知った。加害者はおのれの罪を簡単に忘れる。しかし、被害者にとつては世代を跨いでもその傷の痛み、悲しみを忘れることはできない、という。

向かいでは善波とアミーがとても楽し気におしゃべりをしている。時に声を出して笑う姿は日本とフィリピンの未来を表しているようで、右京の心は和んだ。そしてこの二人の情景を決して忘れてはいけなさと、深く心に刻み込んだ。また他のアジア諸国でもこのような惨事があったかもしれない。そのことを肝に銘じて謙虚な態度で現地の人々と対応しなければならぬと思った。「何よりも再び悲劇は繰り返してはならない」、右京は強くそう思った。

「デイノ、この話をしてくれてありがとう。そしてごめんね」

「今も話したように戦争は人間を悪魔に変えてしまうところがある。兵隊も本当は善良な人だったと思う。しかし、戦争がその兵隊の心を悪魔に変えてしまったんだ。もう昔

のこと、僕たちは友達、そしてもう二度と戦いをおこさないようにしよう」

そういうと、デイノは右手を差し出し、握手を求めて来た。右京は握った手を振った。そして目頭から熱いひとしずくの涙が落ちた。少し時間が経って、右京はデイノがなぜ言わなくてもよい話をしたのだろうか、彼の心中を忖度せざるを得なかった。そして彼はこのような「深刻な問題」をあえて話したのは、デイノが右京を信頼し、もつと深く友情を深めようという心情からに違いない、という思いに至った。そう思うと、彼はデイノの心遣いに対し感謝の気持ちが心の底から湧いて来た。そして、いつか何かしらで彼の心に応えようという気持ちがあふつと沸き起こって来たのだった。

それにしても、と右京は思う。悲劇や惨禍と言うものは例え枯れ葉や土くれに埋もれても決して朽ち果てることはない。求められることはそれらを教訓としてよりよい友好関係を構築し、さらには持続的な平和を樹立していくことが大切である。これらのことは読みようによっては、あるいは聞きようによっては難しく思えるかも知れない。しかし、右京のささやかな経験からではあるが、旅行などを通して、国民同士互いが交流し、友人となることによって実現をするのではないかと、と右京は強くそう思うのである。話

し合い、酒を酌み交わせばみんな仲のよい友人になれるのである。

へ島タンマきい

右京たちがフィリピン・マクタン島に来た主たる目的はスキューバ・ダイビングを楽しむことであつた。今回で四回目であつた。予定滞在は一週間で、既に四日目に入ろうとしていた。右京たちが宿泊している家は、不動産を手広く営む鴨下純一郎所有のものである。鴨下は右京と善波の上司にあたる。

右京と善波の二人は元々は市役所の職員である。しかし、現在は市役所の外部団体である健康福祉協議会出向という身分である。いずれ本庁に戻るようになっていく。一部には「左遷」と見る者もいるが「本庁からの出向」という身分に協議会の中では一目が置かれ、彼らは上司からの束縛や無理な仕事の押し付けなどもなく、比較的自由に仕事をしていた。特に出世欲もない彼らには「居心地のよい職場」ということでもあつた。

今回のマクタン訪問も、七月から九月にかけて取得できる夏休みを利用しての旅行であつた。九月初旬は夏休みが終わつたばかり。財布の中も夏枯れである。そして学校のである。二人はこの時期を逃さず、いつしか二人の恒例の行事となつてしまつたのである。旅行で頭を悩ませるのがホテルである。自分たちの都合と必ずしも合致しないところがある。また、宿泊代は旅行出費の大きな部分を占める。ところが彼らに思いがけない幸運が訪れたのである。宿を無料で提供してくれる御仁が現れたのである。それが鴨下純一郎であつた。

鴨下は、二人が勤務する健康福祉協議会の会長である。会長職に就いて四年ほどになる。会長と言っても週三日勤務の非常勤職で、世間からは名誉職と理解されている。上司といつても通常の職務機構の上司とは異なる。いわばゆるい関係と言える。しかし、このゆるさが二人には幸いした。しかも鴨下は人付き合いが良く、座談の名手とも言える話上手であつた。彼がいると座は賑わい、笑いが絶えないのである。しかも博学と来ている。それだけに人望もあり、請われてこの職に就いたのである。鴨下は酒好き、というより飲み場が大好きであつた。右京と善波も酒好きの点では人後に落ちなかつた。このような事情が幸いし、鴨下と二人は急速に昵懇の間柄になつた。彼らが付き合いだしたのは、鴨下の会長就任の歓迎会からであつた。その頃、二人はスキューバ・ダイビングに嵌まりだしていた。始めてから三年目の頃である。この頃の右京と善波のダイ

はもうすでに二学期が始まつている。それ故、学生も多くの社会人も夏休みボケから目覚め、それぞれの本務に専心している時期である。従つてこの時期にフィリピン旅行する者は余程の暇人か、南の海の虜になつた者か、あるいは商用、社用の者である。国民の多くは海外旅行どころではない。従つて国内外旅行は、この九月から次の秋シーズン十月までは客足が落ちる。いわば端境期とも言える。実はこの端境期を右京たちは狙つていゝのか、利用しているのである。その分、皆がバケーション気分楽しんでる時期、彼らはまじめに仕事をこなし、九月初頭には仕事に支障をきたさないようにしているのである。余人には彼らのこのような計画は世の中の流れに逆らい、あるいは自己本位の夏休暇取得に見えるかもしれない。しかし、彼らには出世欲もない。また、独身であり行動を縛られることも少ない。「我が道を行く」が彼らのモットーなのである。それ故、天候が安定し、旅行者が少なく航空運賃、ホテル代など比較的安く入手できるこの時期を逃す手はないのである。当初はこの時期に夏休暇を取ることに多少のためらいがあつた。しかし、一回、二回と続くと周りは当然のごとく見、取らないと「どうしたの」と心配の声さえかけて来るようになった。また、右京たちも遠慮、違和感なく休暇を申請するようになった。「習性」と成つてしまつた

ビングポイントもつばら伊豆半島で、海外でのダイビングは皆無であった。「そろそろ海外に挑戦しようか」と話していた矢先に鴨下と出会ったのである。この出会いはまさに僥^{ぎやうこう}倖^{しやう}と言えた。

「ダイビング、昔僕もやっていたんですよ。マクタン島で。是非マクタン島へ来てくださいよ」

職場の歓送迎会が行われた席のことであった。鴨下はまるで家が誘うような口調であった。話が盛り上がりながらはずはない。酒も大いに進んだのであった。

「ホテル？うちの別荘を使えばいいですよ。メイドがいますから、食材を買わせて朝食とディナーを作らせればいいですよ。食材などの費用と少しのチップをあげれば問題ないです。ちょうどよかったです。九月頭に仕事でマクタン島に行くことになっています。一緒に行きませんか。チケットは私の方で予約しておきます。一人も三人も手間は同じですから」

鴨下の話はまるで近所のコンビニに弁当でも買いに行くような調子であった。

話はそれで決まったのである。あまりに話がうますぎて二人はあんぐりと口を開け、目は見開いたままだった。

「本当に大丈夫かな」と思いながら、しかし、日が経つにつれ待ち焦がれる思いが募るばかりであった。彼らは数回

の海外旅行は経験している。しかし、スキューバ・ダイビング目的の旅行の経験はなかった。

これを契機に、彼らは年に二度ほどマクタン島を訪れ、ダイビング三昧で南の島の生活を楽しむようになったのである。今回が四回目であった。鴨下は彼ら二人にとってはまさに福の神そのものであった。

右京、善波は航空券購入の手続きやホテルの予約などの雑事を一切することなく、しかも成田までの往復は鴨下の車という言わば「破格の待遇」でフィリピン・マクタン島ダイビング旅行が実現したのであった。

鴨下はマクタン島の別荘の他、かなりの土地も所有しており、今回はその一部の売却という仕事で来島しているのである。限られた一週間のうちに納税や土地の売買契約、コテージの建築打ち合わせと寸暇を惜しんでの東奔西走なのである。

別荘の管理をしているのはコリーとその夫のロレンである。二人の年齢差はおよそ三十歳、もちろんコリーが年上である。年齢、能力ともコリーが上で、ロレンはいつもコリーに叱咤激励されながら働いている。

ロレンは無口で、肥満体型である。そのこともあつてか動きが鈍い。しかし、その身体にはエネルギーに満ちていた。鴨下の話に取れば彼には「隠し子」がいるというの

だ。しかし、無口の分仕事熱心かと言えばその逆で怠け者と言つてもよい。しかし、注意しなければいけないのはこの「怠け者」という言葉である。確かに男たちの多くは昼日中から木陰やベランダでゴロゴロと寝っ転がっている。あるいはおしゃべりをし、カードなどでの賭け事をしてい

る。しかし、これは仕事がないからなのである。島民の多くの仕事は漁業やダイビング用の船・バンカー・ボート（両舷にアウトリガーと呼ばれるフロートが付いた船）あるいは各種商店員、または海外の出稼ぎなどで生計を立てている。これらの仕事は不安定でいつ解雇されるかあるいは休業になるか定かではないのである。

他方、女性には掃除、洗濯、家事、育児と実にまめに働く。洗濯は手洗が多い。それはこの地の一つの風景となっている。山のように積み上げた洗濯物の傍で女性がせつせと手を動かしている。同時に口も止まらない。楽しく笑いながら洗濯をしている様子には「苦痛」という感じは少しも見えない。このような母親の姿を見ているせいなのか子どもたち特に女子はよく働く。自宅、自宅周りを暇さえあればせつせと掃いていく風景は見慣れたものになっている。しかも、箒を動かしている子の背中には妹か弟らしき子が負われているのも珍しくはないのである。

フィリピンの暑さも半端ではない。しかし、海洋性気

候であるので、木陰に入れば実に爽やかな風が頬を撫で、背中を過ぎていく。最近では日本の夏の気温の方が高く、暑い。と言うより危険なほどの気候である。「日本の夏は暑いらしいね」と、何人かのフィリピン人から声を掛けられたほどである。

言葉は悪いが昨今の真夏の日本は「クソ暑く」、しかも命の危険さえおぼすような暑さなのである。電気料金を節約するためにエアコンの使用を控えた高齢者が、熱中症で命を落としたなどの悲しいニュースは数えきれない。

勿論、乾季のフィリピンの暑さもかなりのものである。三十四度の暑さは乾季には普通のことである。こんな陽気の中で屋外労働は命がけである。従って、このような時季は静かに「昼寝」して過ごすのが賢明である。右京はマクタン訪問三回目にしてこのことを発見したのである。右京たちは、時折庭のハンモックで風に揺られながらまどろむことがある。そんな折、少し離れた道路をホテルに向かうバスが通る。バスは満席に近い。しかし、窓からこちらを見る乗客の目は何やら同情心、さげすみの感情が含まれているような気がする。だが、それは少し前の右京たちの視線、感情でもあったのである。今は立場が反対になり、バスに詰め込まれている乗客への同情心を持つようになったという訳である。

「怠け者」という見方はあくまで日本社会、日本人を基準としての話である。右京は物事を決めつけてはいけない、また、事情、心情、背景を十分にくみ取って判断をしなければいけない、ということを感じた。「怠け者」と見えた風景はフィリピン基準で言えば健康維持であり、天が与えてくれた安息と言えるのだ。イタリヤの「シエスタ」(二時間以上にも及ぶ昼休み)「ほどではないが長い生活の中から生み出された習慣なのである。それだけに他国の人間がとやかく口を挟む筋合いはないのかもしれない」。

「おはようコリー。昨晚は？」

「スリータイム」

と言いながら彼女は右手の中指三本を立てる。これが彼女との毎朝の恒例の挨拶である。若いロレンはまだしも高齢と見えるコリーが一晚に三回もまぐわうとは信じられない。しかし、目くじらを立てるほどのものではない。笑いながら「グッド」と言いながら親指を立てる。それで十分なコミュニケーションが取れる。

コリーは大変スリムな身体をしており、陽気である。年齢は「六十歳」という。後ろ格好を見ればその通りか、もつと若く見える。しかし、正面から相対すると随分と違ってくる。その顔には彼女が負ってきたであろう多くの苦勞や悲しみが深く刻み込まれているように見える。右京に

るほどになっている。幼稚園児らしき幼い子から「ウキョウ」と呼ばれるのは違和感を覚えたが「ダディ」と呼ばれることには悪い気持ちはしない。ついつい文房具などの土産を持つて行くことが多くなっている。しかし、これは子どもたちの小さいながらの知恵なのである。親近感が生まれれば子たちにながしの、あるいは思いがけない福が回ってくるかもしれない。彼らはそんな縁のうまみを幼くして体得しているのだろう。右京は右京で、子どもたちの心理、事情を知った上での行為であった。あるいは独身で子もない寂しさらしきものが微妙に癒されていることを感得しているからかもしれない。

ところで、彼女の所には四歳になるボーイという男子がいる。一年ほど前に彼女の出身地であるダバオの姪が「育てられない」とコリーのところに「置いていった」のである。しかし、コリーは不満や悪口など一言も口にしない。「淡々」と面倒を見ている。しかし、時折「右京、ボーイを上げるから日本に連れて行ってくれ」と口にする。「簡単にはいかないのだよ」というが「なあに段ボールに入れていけばよい」と事も無げに言う。本当にそう思っているのだ。こんなことを口にするのはやはり彼女もひそかに苦勞をしているのだろうと右京は推測してしまう。

彼女はダンスが大好きで料理をしながらでも身体を揺

は七十半ばか八十歳ほどに思える。しかし、その人生を刻み込んだ表情には美醜を超えたいぶし銀のような味わいを覚える。しかも、彼女は姉御肌で面倒見がよい。彼女はミランダオ島ダバオの出身である。離婚し、マクタンに「流れ着いた」という。「流れ着く」という表現をしたわけではない。とにかく「あちこち渡り歩き」家主の鴨下と出会い、現在のメイドに落ち着いた訳である。苦勞したせいであろう、彼女は非常に親切心に富んでいる。困った者がいると放つてはいられなくなる。直ぐにあれこれと面倒を見てしまう。フィリピン社会には元々「共助の精神」がその通底にある。そんなバックボーンと彼女の親身の良さが重なってあれば当然のごとく助けを求めて人が寄る。特に同郷人たちは彼女の助け、援助を求めてひっきりなしに訪れて来る。皆、彼女を「ママ」と呼ぶ。そして、彼女は同郷人の来訪を決して拒むことはない。コメを与え、小銭を気持ちよく貸している。六月は入学式、新学期が始まる。日本同様どの家庭でも子の入学式、新学期の用意で物入りである。それで多くの家庭では借金をして子の学用品や制服を用立てる。知り合ったばかりの近所の主婦が、右京に借金をねだってくるほどである。そんなこともあり、いつの間にか近所の子たちが右京を「ダディ」とか「ウキョウ」と呼ぶようになった。そんな子たちの数は片手を越え

すっているほどである。右京も下手なダンスをする。夕食後、二人は居間でラジオの音楽に合わせてダンスをするのが日課となっていた。善波と鴨下はヤジを飛ばし、面白がっているだけである。

三種置き遁走、悪夢の一夜

右京が「今日も頑張ろう」と呟いたのには理由があった。いつものダイビング・インストラクターのデイノが急用で同行できなくなったのである。彼はこのマクタン島ラブラプ市マリバゴの町会議員を務めている。その関係の所用でセブ市庁まで行かねばならなかったのである。その代わりとしてコステイバ・アメリオ(愛称アミー)がインストラクターとして右京、善波に付くことになったのである。日本人女性のインストラクターは珍しくはない。日本人が経営するダイビングショップなら大抵一人はスタッフとして勤務している。しかし、フィリピン女性のインストラクターは珍しい。右京も善波も彼女がインストラクターに付いてくれることには大歓迎であった。アミーは色白でスタイルがよく、美しかった。ウェットスーツを着ると体の線がくっきりと現れ、三人の子を持つ母親とはとても思えなかった。

フィリピンはマゼランの到来により、一五六五年から一八九八年までの三〇〇年以上にわたって植民地支配が続いた。一八九八年と言えば明治三十一年である。「つい最近」という言葉が漏れてもおかしくない。スペインの支配はキリスト教をもたらし、またフィリピンの歴史と文化に大きな影響を与え、現在もその影響が残っている。

一八九八年から一九四六年まではアメリカの統治時代である。四十九年、およそ半世紀の間アメリカの支配下にあった。この間に教育制度やインフラが整備された。アミーのDNAにはアメリカ人やスペイン人たちの遺伝情報が色濃く含まれているのだろう。

人は得てして外面に目が行きがちである。アミーを見る者にも同じようなことが言える。しかし、交遊が進むにつれ彼女の明るさと前向きな生き方、何よりも強靱な生活力に驚かされ、感心させられる。これが最大の美点と、右京も善波もよく口にしていた。当然ながら彼女に好意を寄せる男性は数多を数えた。しかし、彼女はそんな男性の視線や好意を意に介すことはなかった。というよりそのようなことを取るような余裕はなかった、と言える。だが無いとなると燃え上がるのが人の心である。彼女の意向など付度もせず、言い寄る男たちは多かった。口こそ出さなくとも右京も善波も「機会あらば」という情念は心に

コリーはおかしなことをいうものだ、と思いながら、右京は尋ねた。

「それは事情があつてね」

コリーはアミーの顔を窺いながら言った。

「事情」という言葉を聞いた善波も身を乗り出してきた。

「実は三人とも別れた夫の子なのだが、三番目の子は夫の子ではない。事情があつてね」

また「事情か」と、右京は怪訝な顔をした。

「事情って何」

右京、善波が同時に同じ言葉を発した。

アミーは下を見詰めたままである。

「右京、善波聞いて」

コリーは二人に対し頬を膨らませ、不満たらたらの口調で話し始めた。その話は右京たちには信じられない、そして呆れるような内容であった。

二年前、末っ子の娘が高熱を出したというのである。熱帯のこの地では「高熱」と言えば真つ先にマラリヤや Dengue 熱を疑う。特に最近ではフィリピンでは Dengue 熱が流行している。蚊によって媒介され八日の潜伏期ののちに高熱に襲われる。「死亡はまれ」というが、幼い子にとっては怖い病気である。

アミーはコリーに助けを求めたが、治療費までは言い出

潜めていたのかもしれない。

アミーは二十六歳、ミンダナオ出身のシングルマザーである。彼女はしょっちゅうコリーの所に来ている。そのこともあつて、右京と善波も顔なじみであった。

彼女には子どもが三人いる。長男が七歳、次男が六歳、少し離れ長女が二歳である。フィリピンでは概して子どもが多い。四人、五人などというのは当たり前、十人というのも珍しくもない。そして間を置くことなく連続して産むという例が多い。そういう事情を知った右京は、アミーに「次男と長女の年の差が四歳離れている」ことを尋ねた。夕食後の雑談中ことである。

「それには理由があつて」

コリーは苦笑いをしながらアミーに代わって答えた。

善波も右京もがぜん興味に引かされ、身を乗り出した。

コリーの話が続く。

「三人目の女の子は前夫の子ではない」という。右京はキョトンとなった。

「では三人目の子の父親は誰なのか。今は独身と聞いていたアミーは二度の結婚をしていたのか」と、右京は思った。

「アミーは一度しか結婚していないよ。でもね、三人目の子の父親はいないと思っているよ」

「いるのにいない」

せなかつたらしい。アミーの家は別荘から二百ほどの所にある。道ばたの空き地に竹材やヤシの葉などで作った四畳半ほどの実に粗末な家である。そこで彼女は駄菓子や食事を提供する店を営んでいた。あまりにも小さいバラック建ての店なので現地の人達は「モンキーストア」とさげすんだ言い方をしている。勿論エアコンどころか扇風機さえもない。中には粗末なベッドとマットが一つずつあるに過ぎない。汗をたっぷりと吸い込み黒ずんだベッドの上で四歳の娘は呻吟していたという。

お金のないアミーは苦しむ子に団扇で風を送りながら思案に暮れていた。そして考え抜いた末に日本で言う「口寄せ」ばあさんと呼んだのである。お礼は現物でもよいのである。しかし、「まじないや拝み」で治るなら「世の中に医者はいらない」である。

案の定である、子の病は少しも快方には向かわず、逆に悪化していったのである。アミーは彼女のブライドにかけても元夫に援助を求めたくはなかった。しかし、事態はブライド云々を言っている場合ではなかった。

元夫はいわゆる不倫に走って妻と子どもを捨てたのである。日本風な表現で言えば「見目麗しく、しかも気立ての良い糟糠の妻」を捨てるなんてちよつと考えられない。しかし「男女の仲の事情」は当事者同士でなければ分からな

いところがある。他人からは「もったいないほどの妻」でも元夫には「鬼女」に思えたのかもしれない。あるいは走った先の女性が余程よかったのか。これは本人に聞いてみなければ分からない話である。ひよつとして本人も分からないまま流れに乗って、あるいはのつびきならない状況で離婚にいたったのかもしれない。

フィリピンはASEAN（東南アジア諸国連合の十カ国）国唯一のキリスト教国である。人口（約一億一九〇〇人・二〇二四年現在）の約九三％がキリスト教徒である。そのうち約八三％が戒律厳しいカトリック教徒である。離婚はご法度である。しかし、それは建前ではないようである。現実には離婚の数が多し。コリーも離婚経験者である。彼女の所に来る女性のほとんどが離婚者なのである。

ところでアミーは元夫のことをどう思っていたのか。彼女は「清々した」とも「これで扶養家族が一人減った」とも言っていた。この「扶養家族が一人減った」という言葉は右京にはよく理解できる。総じてフィリピンの夫たちには「働かない」ということがある。働き口がなかったり、あつても給与が少なくという事情が背景にある。アミーの夫もそうだったのかもしれない。賭け事が好きな彼らは木陰で賭博に熱中している風景はいつものことである。この地では闘鶏も盛んで、闘鶏用のオンドリを飼育している男

は誰にもできない。

臨月を迎えたある日、マミーは無事に女子を生んだのである。

「まさかあ」

二人同時に叫んだ。

「お金も持つてこず種だけ残していったのか。許せない」

善波の声は震えていた。

「とんでもない男だ。男の風上にも置けない」

右京も憤懣やるかたない、という表情で嘆いた。しかし、彼らのこの憤慨を第三者が見ていたならば、多分噴き出したに違いない。そして憤慨という皮は「アミーへの下心を包んでいる」と喝破したに違いない。勿論「男の風上」という言葉には嫉妬がにじみ出、羨望が含まれていることも彼らは知る由もなかった。

コリーは興奮して止まない男たちを見ながら笑いが体の中から湧き出すのを禁じえなかった。しかし、笑いを見せる場面ではない。彼女は必死にこらえた。直接利害関係もないのにどうしてこんなにムキになっているのだろう。日本の男はまるでフィリピン人の常識の外にある。でも悪人ではない。そんな思いが彼女の脳裏に浮かびあがったに違いない。

性が結構多いのである。

アミーにとつてみれば三行半をつけた男である。今更に「懇願」などということは彼女の矜持を汚すことであつた。しかし、病に苦しむ子は男にも半分の責務がある。小さな命が生きたため苦闘している場面で矜持などを持ち出すことは「間尺に合わない」と子は叫ぶに違いない。アミーは思いあぐねた末に元夫に連絡をしたのである。事情を聞いた元夫はいそいそと来たらしい。

しかしである。元夫は肝心の治療代を持参してこなかったのである。何と無一文で来たのである。そして、一晩過ぐすと逃げるようにして帰ったという。いや「アミーが追い出した」というのが真実に近いかもしれない。これはコリーの言である。

結局、コリーの援助もあつてアミーは娘を病院へ連れて行き、診察を受けることができたのである。

「これならもつと早くママ（コリー）にお願いすればよかった」

アミーは表情を曇らせながら呟くような言葉で話した。しかし、残念ながらこのようなことは誰にでもある苦い経験でもある。「後悔先に立たず」という俚諺がフィリピンにあるかどうか定かではないが、恐らく地球人誰もが一度は経験するに違いない。その点からもアミーを責めること

四 歯なしの話

幼い子三人を抱えての生活は楽ではない。アミーはさすがに自立の道を考えざるをえなかった。如何に互助の精神が富んだこの地でも毎回毎回の哀訴にも限度があるというものである。キリスト教国のこの地に「仏の顔も三度まで」という言葉があるか否かは定かではないが、アミーはこんな思いにいたつたのである。そして、もはやこれ以上の無心はできない、と悟つたのである。そこまで考えが及べば当然自立の方法に考えをいたす。そして考えた末に身近で、しかも伝手が多いダイビングショップでの仕事から始めようとしたのである。ディノのショップのオーナーは彼の母親である。彼女は快くアミーの依頼を受け入れてくれたのである。しかし、賃金はわずかである。しかも乳飲み子もいる。勿論家事もある。モンキーストアのわずかな収入を加えても家計を賄うに足りなかった。それで時間を何とか編み出してホテルの土産品の作製などをして「爪に火をとます」ような日々を過ごしたのである。そんな厳しい日々の末にダイビング・インストラクターの資格を取得することができたのである。並大抵のことではない。

ダイビングは体も要する。また、お客をガイドするレベルでは単に知識だけではだめである。相当の体験を積

むことが必要になる。そしてこの体験の中で潮の流れ、地形、緊急・救急対応などを学んでいかなければならない。アミーがインストラクターの資格を取得したのはプロとしての第一歩に過ぎなかった。まだ独り立ちと言う訳にはいかなかった。しばらくは経験豊富なインストラクターのアシスタントをしながら知識、技能を積んでいかなければならなかった。従って、報酬も雀の涙ほどしか増えなかった。当時、平均的日当は三百ペソから五百ペソ（およそ百五十円から二百五十円）だった。ダイビングのお客は毎日あるわけではない。日本人を基準にして考えると夏休み、冬休み、春休み、そしていくつかある祝日を含む連休が書き入れ時で、後はそれほど多くはない。月の内半分、即ち十日から十五日ほどが稼働日と言える。日当が五百ペソとして月上限の十五日稼働として七千五百ペソである。ただ、チップは増えた。一グループから平均百ペソとして十五グループでおよそ千五百ペソである。賃金とチップを合わせると九千ペソである。これにモンキーストアの収入約三千ペソを加えると一万二千ペソになる。一日平均およそ四百ペソである。日本円で千円である。これで生活を支えることが何とかできるようになったのである。「海」は「産む」に通じる。あらゆる生命の始まりは海である。その海がアミーに生きる活力を与えてくれたのである。

ーの口の辺りを視線で探った。

「歯がないぞ」と、右京は気づき、さらに視線を凝らした。その時である。コリーが口をもぐもぐさせながらしゃべりだそうとした。右京はあつと思つた。アミーも同じようにもぐもぐさせながら、しかも手で隠しながらしゃべっていたのである。

「右京と善波にお願いがある」

コリーは姿勢を正しながら切り出してきた。

右京は直ぐにピンときた。隣に座る善波に横眼を向けると彼もまた右京と同じような思いを持ったようにやりとをした。

「コリー、お金のことだね」

先手を取って右京はざざりと聞きだした。

コリーは目をパチクリとして沈黙してしまった。

「お話は聞くよ」

善波もゆつくりとした物言いで、しかも笑顔を浮かべている。

コリーは善波のその静かな、そして笑顔に安心したのであろう。

「実はアミーのことなのけど」と、話を切り出してきた。「それで」

善波の表情は依然として小さく笑みをたたえている。

しかし、アミーの苦難は止まることなく依然として続いた。実は栄養不足から彼女の歯がごつそりと抜けてしまったのである。主食であるコメは何とか購入することができても副食である魚や野菜の摂取が十分でなく、しかもアミーの身体の養分を母乳として赤子が吸い取っていたからである。

右京たちがそれを知ったのは一年前の九月のことであった。別荘に着いた翌日アミーは子どもたちを連れて挨拶に来た。その折に「インストラクターのライセンスを取得した」という話がアミーからあつて、右京は善波と共にお祝いを述べ、そして「一緒に潜ろう」と盛り上がったのである。しかし、後で思いついたのであるが、いつも手で口の辺りを隠していたのである。右京は「どうしたのか」と怪訝な気持ちを抱いた。しかし、到着した当日午後八時過ぎである。話も盛り上がっており、またあわただしさの中で直ぐにそのことは忘れてしまった。というより頭から飛んで行ってしまった。そして善波からも格別そのことは話題に上がらなかった。

翌日である。アミーが子どもたちをぞろぞろと連れて別荘にやって来た。昨晩上げたお菓子や衣類、文房具のお礼にやって来たのである。

「やはり」と右京は思つた。右京は会話の合間合間にアミ

「アミーかわいそう、子どもが三人、とてもお金がかかる。長男が小学校の一年生になった。ノート、ペンシル、制服必要」

コリーの話はなかなか核心に行かない。傍のアミーは何となくよそよそしく落ち着かない。意味もなく子どもに話しかけている。

「アミーのことだね」

右京は得心した。

「アミーはどうしてお金が必要なの」

右京の言葉にコリーはまたも口をもぐもぐとさせた。

隣のアミーも言葉をなくし、呆然としている。

「コリー、僕ら友達、話してください。相談に乗るよ」

善波の優しい言葉にコリーは目をしばたき、グスリと鼻を鳴らしている。それで安心したようだ。

「実はアミーの歯のことなんだけど」

「ああ、やっぱりアミーの歯は抜けたんだ。可哀そうに」右京は心から彼女のことを気の毒に思つた。そして、再び彼女の元夫を憎く思つた。男があの日アミーと夜を共にしなければこんな苦勞はしなくとも済んだのである。

「お医者さんが言うのには全部入れ歯にすると八千ペソ（当時の為替相場で約二万円）する。しかし、お医者さんにはアミーにお金がないのを知って『六千ペソでやってあげ

る』と言ってくれている」

彼女の言葉は流れる水のごとく滑らかであった。

「右京と善波、何とかアミーを助けて」

そう言うのと彼女は十字を切り、そして「サンタマリア」と口にした。

アミーは俯いている。その目から涙が零れ落ちている。

アミーの話には嘘は無いようであった。フィリピン人は無心することがある。そんな時には大概「両親が病気とか亡くなった、あるいは事故に遭って仕事ができない」などと際限なく理由を並べ立てる。確証はないが、日本人は彼らのゆすり、たかりの格好の対象になっている節がある。情にもろく直ぐに同情してしまう。また、財布を尻ポケットからはみ出したまま平気で人込みの中を歩いたり、衆人環視の中、なんの懸念もなさそうに札束を数えているなどという不用心さ、これらはこの地では「どうぞ盗ってください」と誘っているとか見えない。こんな様子から日本人は「歩く財布」と見られ、スリや恐喝、ぼったくりなどの格好の対象にもなってしまう。しかし、最近では日本人も随分と用心深くなっているので被害は減少しているようだ。

そんなことで右京はできるだけ服装は質素、ないしボロに近いものを着るようにしている。一度フィリピン人と間

違えられ英語で話しかけられたことがあった。妙齢の女性で彼女が宿泊しているホテルの道順を尋ねてきたのであった。日本人と分かると顔を朱に染めて「ごめんなさい」と謝った所作がなんとも可愛く、忘れがたい経験となった。

「六千ペソという大金だね。コリーやアミーには色々お世話になっているので何とかしたい。しかし、我々もお金の余裕はない。京ちゃんと相談の上返事をするよ」

善波はそう言いながら私に視線を移した

「善ちゃんの言うとおりで。考えさせてくれるか」

コリーには予想通りの返答だったのだ。

「勿論、問題ない。だけど良い返事を待っているよ」

そして、大きな動作でまた十字を切り、「サンタマリア」と声を出した。コリーはよいこと悪いこと問わず何かにつけて「サンタマリア」というのが癖であった。

アミーも「サンキュー」と声を出し、善波、右京へそれぞれ頭を下げた。

善波は慎重な男であった。しかも数字にも強い。右京が彼と一緒に旅行では予算などの金銭に関わる一切は彼に任せていた。二人共通の財布（袋）を用意し、そこに二人とも同額のお金を入れ、足りなくなったらまた入れる。旅行中の二人共通の出費はその袋から支出する。善波はその金の管理を少しも嫌がらずやってくれていた。ルーズなどこ

ろがある右京にとっては大助かりであった。

この入れ歯の資金援助については話し合うまでもなく二人の気持ちは既に決まっていた。しかし、二人にとっても大金であることは間違いないことである。お開きにした後、二人はそのままりビングに残り話し合うことにした。

「多分『歯の治療代』というのは間違いないだろう。ただ、なんの見返りもなく簡単に承諾するのはちよつと考えものだね。二人から甘く見られるのは今後のためにも避けたいね」

右京の話に善波は大きくうなずいた。

「一人三千ペソの負担、二次会のカラオケを含めた金額と思えばそれほど負担ではないですね。問題は京ちゃんが言うようにただ上げるのでは癖になってしまうので、ここはきつちりとギブアンドテイクの精神で行きましょう。それにしてもどんな見返りを求めるかだね。一人三千ペソ分の見返りという大金と、それに見合うものはなかなか思い尽きませんね。見返りはむずかしいね」

「例えば朝食の調理とか・・・」

少しの間思案した善波は顔を上げるとそう話した。

「なるほど、しかし夕食はコリーが作ってくれているからね。ほかに何かないかね」

右京も咄嗟のことであってそう簡単には思いつかない様

子であった。

「どうですかね、マッサージなんかは」

善波はバット明るくなった顔で提案した。

「あつ、それってグッドアイデアだね。それに決めようか」

右京も納得したようで善波同様明るい顔になった。

ふたりは満足げな表情で、互いに見つめ合った。これではまだ乳児がいたが、それは上の子どもたちに世話をさせればよいことであった。そのような弟妹の世話はこの地ではどの子もやっていることであった。日本にいてもかつては弟妹を学校に負んぶしていつて世話を焼く兄姉がいた。子どもが家事労働の一端、あるいは労働の担い手であった時代があったのである。ドラマ「おしん」は現実のできごとであったのだ。

二人は具体的な内容を詰めた。

夕食後、都合の良い日、一人当たり三十分間、合計一時間を見返りとしてマッサージを提供すること、と決めた。二人にとって間尺に合う話ではなかったが、彼らの仏心がそう決めたのであろう。

後日談である。

翌年の同じ月、右京、善波はやはりマクタン島の鴨下の別荘を訪れた。コリーは大歓迎であった。時刻は午後九時近くであった。二人はデイノの迎いでマクタン島にあるセブ国際空港から別荘に直行したのであった。直行と言っても途中でジョリビー（フィリピンを代表するファーストフード店でマクドナルドを超える人気を誇る）に寄り夕食を撰った。セブ、マクタンは訪れるたびに町の様相が変化している。なかでも高層のホテルが次々と建設され、この国の発展を象徴している。現在、多くのフィリピン人が海外へ出稼ぎに行っている。日本にも出稼ぎ者がきている。しかし、「いずれそのうち日本人がフィリピンへ出稼ぎに行く時が来る」が、現実になるのではないかと善波と右京は話すことが多くなった。とにかく子どもの数が多い。子どもは国の未来の富と力の指標でもある。この国は「人口の高齢化と少子化」は全く問題にもなっていない。実にうらやましい。

翌日、朝食の後、アミーが挨拶に来た。前回から一年が経過していた。子どもたちは成長し、記憶に残っていた顔つきと一致しなかった。アミーから言われてようやく思い出す右京と善波であった。

右京が気になったのはアミーが口元を手で隠しながら話をしていることであった。後で善波も同じ疑問を持ったこと。コリーがついと立ち上がると台所へ行った。思わず右京と善波は顔を見合わせた。

「コリーが絡んでいる」

瞬間、二人はピンときたのである。

二人の問いにアミーはなかなか応えてはこなかった。それどころか口をつぐんだままだった。二人はここが我慢のしどころと思った。子どもの話をしたり、ダイビングのお客様の様子を尋ねるなどをしてできるだけ彼女の気持ちにほぐれるように努めた。その努力が実った。予想もしていなかったことであった。

「コリーに取られた」というのである。「取られた」というより「むしり取られた」というのが正しいのである。

コリーとアミーの力関係を考えるとアミーを責めることはできなかった。しかし、事実を確認しないわけにはいかない。二人は台所のコリーに声掛けをし、リビングに来るようにいった。戻って来たコリーはいつもの陽気さは全く見られなかった。渋い表情で、しかも口をつぐんだままである。

「六千ペソはどうしたの」

善波の問いに、彼女はアミー同様沈黙である。

「アミー、六千ペソはコリーに渡したのだね」

とが分かった。

やはりというか、案の定というか、アミーの口はふにやふにやし、入っているはずの歯が見えなかったのである。

右京たちのこわばった表情を素早く見つけたアミーは既に涙声になっていた。そして幾度も謝罪の言葉を口にするのであった。右京も善波も強く詰問すべきところであったが、その消沈した姿を見て何の言葉も出てはこなかった。

実は、二人はこんな事態が出来ることをある程度は予想していた。彼女にとつて六千ペソはひと月分の収入に近い。しかも六千ペソの札束を一度に手にしたのは恐らく初めてに違いない。しかも未だ頑固な幼子たち三人を抱えている身である。百ペソだ、二百ペソだとお金が消えていくことはあつたに違いない。「チリも積もれば山」である。六千ペソの山が大崩れしてしまつたことは容易に想像できるのである。しかし、このまま「無罪放免」とする訳にはいかなかった。右京と善波はアミーが落ち着くのを待った。この時、コリーも同席していた。おしやべりで何でも口をだしたがる彼女が静かに、しかし硬い表情でいるのを右京は不思議に思っていた。

二人はアミーの落ち着いたのを認めると「六千ペソ」の行方について問いただした。勿論、彼女の心情を考慮して声を荒立てたり、詰問するようなことはせず、穏やかな

善波の問いに彼女は「イエス」と静かに答える。「全額六千ペソか」と、再び問う。今度は「ノー」と、はっきり答えた。「いくら？」と重ねての問いに「五千ペソ」という。

善波は大きく息を吐きながらコリーの方に身体を向けた。そして、

「コリー、アミーの話は本当か」

と、問いただした。

コリーは例によつて口元をもぐもぐさせている。いつものような明快さはない。しかも段々と表情が陰しくなってきた。意図的か感情の高ぶりのためなのか定かではないが、彼女の口調は早く、しかも明瞭でないため右京と善波たちには聞き取れなかった。

「もう少しゆっくり、はつきり話して」

右京は右手を上げ広げた手を何回か軽く押しながら頼んだ。

さすがにコリーは口調を緩めた。

「ソリー」

さすがに申し訳なさそうな表情で言った。

右京と善波は理を尽くし、一つずつ念を押しながら事の次第を解き明かしていった。コリーはこのような理詰めでの話は苦手である。しぶしぶとその経過を話し出した。

二人は驚いてしまった。あの六千ペソのうち五千ペソはコリーが使ってしまったのである。それは細い金のネックレスに「変身」し、今現在、コリーの首に掛けられ二人の目の前で微かに揺れているのであった。

そして、何とか聞き取った言葉から「五千ペソは今までアミーに貸した金額であり、その返済として受け取ったものである」と言うのである。

「証文は書かなかったが、『必ず歯の治療に使うのだよ』と何度も念を押したろう」と問うのであったが、全く理解をしてもらえなかった。それどころか前回の約束事などは忘れたかのようにただ、ただ自分の正当性を並べ立てるのだった。

アミーに尋ねるとコリーの言う通りであるという。千ペソは「いつの間にか消えた」という。収入がない身であれば当然の成り行きと言えよう。

二人が驚いたのは「治療に使う」という約束でもらったお金を全く「別の用途に消費」してしまったことにアミーもコリーも「申し訳」の「も」のひとつもなかったのである。「国民性の違いか」と二人は後に話し合ったほどである。日本人なら持つ罪の意識の欠片もないということである。

互助精神に富んでいるこの地では「あるものがないも

か不幸か定かではないが、揉め事が嫌いな善波も右京も「良い結末」と満足した。ただ、彼らが彼女たちをこれ以上に追及しなかったのは彼らの思い遣りばかりではなかった。英語と言う表現手段の拙劣さもその大きな要因であった。世界がグローバル化している現在、語学の不得意は様々な場面、分野で消極的な対応になり、また時には相手の不当な要求をしぼしぼ受け入れてしまうことも起こるのである。海外旅行が当たり前になった昨今である。日本の小学校でもようやく二〇二〇年から英語が教科に取り入れられた。実施学年は三年生からである。朗報と言える。

「雨降って地固まる」の諺通り、四人の関係は以前に増して良好になって行った。何より大きいのはやはりマミー、コリーたちの底抜けに明るい性格である。この陽気さがいつも場を盛り上げ、救ってくれたのである。

この夜もそうであった。彼女らは、右京たちがビールを飲み始めると、先ほどまでの暗い顔はどこへ行ったらやで、とにかく明るくしゃべりだし、コリーは例によって右京の手を取りダンスまで始めたのであった。

これが後日談の珍事であり、笑えない悲劇、いや莊嚴なる命の誕生話である。

五 バンカーボートへ乗船

のへ恵む」ことは当然で、格別に感謝をするほどでもないのかもしれない。また、国民性なのかもしれない。しっかりと大地に根を張り巡らした観念、信念を解きほぐしたり、変えたりすることはむしろ罪になるのかもしれない。逆に尊重することが人間関係を良好にする結果につながるのかもしれない。二人はそのことに気付いた。賢明なことであった。それに、二人とも「上げたお金が二人の期待通りにはいかないのでは」というかすかな懸念を持っていた。その心配が的中したのである。二人は「もうこれ以上追及することは止め、授業料」と思うことにした。

この二人の対応にコリーもアミーも喜色満面であった。コリーは立ち上がると台所へ向かい、そして缶ビール（フイリピン産サンミゲル）を二缶胸に抱きかかえて持ってきた。そして、テーブルの上に置くのと缶を開けた。プシュッという快音がした。開け口から静かに泡が立ち上がってきた。

「これは わたしの おごり」

笑いが深く刻まれた顔を右京、善波へと幾度も向けるのであった。

この夜、家主の鴨下は商用でセブ島へ行っており、夜はパーティーに出席していた。もし彼が在宅ならば「二人とも甘い」と一喝されたことであつたらう。彼の不在が幸

翌朝八時半ごろ、アミーがダイビングのプラン打ち合わせにやって来た。相変わらず三人の子を引き連れている。長男は右京を見るや、彼の前に来て彼の右手を取った。そしてその手を長男自身の頭上に置き「ダディ、モーニング、サー」と挨拶するのであった。それを見ていた次男も同様な行動をした。この仕草は年長者に対する敬意を示すものであった。目上ならだれでもと言う訳ではなく、親族とか地位のある人、また彼らに益をもたらす人に対する礼儀作法であった。子どもたちは既に「右京を自分たちに幸いをもたらす人」と鋭くかき分けていた。これ以来、彼ら子どもたちは会ってから二、三日も経たないうちに右京の顔さえ見れば「ダディ」と呼んではばからなかった。このダディという呼び方もどうやら敬意や感謝を込めた呼び方のようであった。知らない者が聞いたら息子、娘と誤解するかもしれない。もし、彼に妻が恋人がいてそれを聞きつけたならば間違いなく騒動になるだろう。

しかし、右京は「ダディ」と呼ばれることに悪い気持ちがいなかった。四十八歳の彼は、独身を謳歌しながらもふとした弾みに独り身を寂しく思うことが起きていたのである。そんな心情もあつてか、迷惑に思うどころかまんざらでもない様子であった。従って彼は子どもたちの言うが

ままにしていた。そして子どもたちと顔を合わせる度にそれぞれに十ペソ（約二十五円）ずつ小遣いを上げていた。この金額であれば近所の駄菓子屋で十分な買い物をし、彼らの胃の腑を満足させることができた。右京の出現は、子どもたちには思いもかけない福の神との出会いでもあった。

生活の営みの中で買い物は男女問わず好きな分野である。特に女性にはその傾向が強い。しかもこの日の買い物は「大蔵省」が付いていたものだから、傍目にもウキウキの様子が見えた。

アミーはダイビングなどの仕事の場合は子どもたちをごく親しくしているカリンに世話を頼んでいる。カリンもやはりダバオ出身であった。それにカリンにもアミーと同じような年頃の子たち四人がいた。「四人も七人も変わらない。いつでもOK」と、彼女はいつも快く引き受けてくれる。強い味方の肝っ玉かあさんであった。従ってアミーの心中は実に軽やかであった。

幸い、デイノの会議も思ったよりも早く終え、予定通りの九時からランチの食材購入に同行できたのであった。

「町会議員」といっても日本で言えば村会議員と町内会長の中間にあるような立場である。従って歳費も雀の涙程度で家庭を維持することはとてもできなかった。デイノの算

この事情は右京も善波も承知していた。「こまごましたクレームはみつともない」というのが彼らの心情であった。

「おおらか」というか「ズサン」というか、細かいことにこだわらない日本人の性向をしつかり飲み込んでいるデイノらは、従って遠慮なしに、何の懸念もなく買い物をしたのである。

買い物はかなりの重さになった。ショップに着くと、デイノはショップの若い衆を呼び、全て船に運ぶように指示した。ダイビング機材は既にボートへ運び終えていた。ショップから船着場までは十メートルほどである。

船着場といっても防波堤とか係留の設備とかがあるわけでもない。岸がなだらかに傾斜し海につながる。その海面は一気に広がりそこには大小十数隻のバンカーボートが所狭しと停泊している。船溜とも言える。バンカーボートは両舷から張り出した竹製（太い竹を縦二つに割ったもの）のフロート（トリガー）が特徴である。丁度アメンボの張り出した足のようなものである。このトリガーのお陰で船は少々の波でも揺れずに航行ができるようになっていく。右京たちは接岸している手漕ぎのボートに乗り込む。船首の舷側に「バラクーダ」と英語で書かれた船がこの日チャーターした船である。それに向かって進む。スタッフの一人が竹

段は「村会議員から市議会議員」への「出世」というものであった。考えることは日本人もフィリピン人も同じである。こんな事情が背景にあったものであるから、彼はダイビングインストラクターの仕事は手放せないのだった。

購入したのは鶏肉、豚肉、サバぐらいの大きさの魚が二匹、コメが三キロほど、野菜。さらにマンゴー、パイヤ、ココナツ、バナナなどの果物、その上さらにコーラやサンミゲル（フィリピン地産ビール）、ミネラルウォーターなどの飲み物である。一行四人でようやく運びきれるほどの品数、量になった。ランチのコメにしても四人で三キロなどとは誰がみても多すぎる。しかし、裏事情があった。この品数はどうしても必要であったのだ。船のスタッフたちのためである。今回もスタッフは必要以上の五人ほどであった。今回はデイノのダイビングショップから船で二十分ほどのポイントである。船長の他に三人ほどいれば十分な数であった。それが五人である。食材が残ることを勘定に入れていたのである。そして残った物は家族のために持ち帰っていたのである。

この年を含めた数年の間、世界的に穀物不足が生じ、その波はフィリピンにも及んでいた。そのためスタッフたちの中には米が買えず砕いたトウモロコシを主食の代わりにしていた者もいたのである。

竿を突き刺しながら船を進める。と、小船は少しの波でも左右前後に揺られてしまう。陸地から望見していた時には全く思いもしなかったことである。波を避けながらゆっくりと十分ほど進んだところで船に着いた。「頭に気をつけて」と、デイノが大声で叫ぶ。手漕船は張り出したトリガーの下にもぐるように着いたのである。右京たちは注意されるまでもなく十分に分かっていたことであったが、やはり時折頭をゴツンとぶつけることがあった。舷側に繰り出された梯子を伝い船上に上がると、機材を点検し携行した荷物を確認した。特に財布とパスポートは念入りに確認し、バッグの奥底にしまい込んだ。

船の船尾にはトイレと台所が両サイドに分かれて設置されている。トイレは例によって便座がない。傍らには水の張られたポリバケツが置かれ、その中に水桶が置かれている。排泄を終えたら水桶で水を汲み流すのである。文字通りの水洗である。しかし、ぬぐった白いトイレツとペーパーが青い海の上ゆらゆらと流れる様はいささか情緒に欠ける。このトイレは縦一・五メートルと横一メートルほどの広さで天井はない。立つと四方ブルーの海が見渡せる。船が動いている時はスムーズに用が足せないものであるが、終えて四海を見渡せば、気持ちも腹具合も晴れやかで爽快な気分になる。

しかし、このトイレの構造上、女性はセパレート型の

水着着用が必須である。もし一体型の水着であれば胸を露出させたまま立ち上がってしまう恐れがあるからである。こんな状態では恐らく落ち着いた用便は無理であろう。日本人女性のお客を増やそうと思えばトイレ、着替え室の改善は喫緊の課題であるが、その辺の理解度は日本人とフィリピン人ではかなりの落差がある。改善の気配は感じられない。

台所と聞くとシンクや調理の場を想像させるが、多くのバンカーボートはそのような設備はない。鍋、皿などを置く棚とかまどがある程度ある。船によってはガスボンベで煮炊きするが、多くは薪や木炭（ヤシの実の殻から製造）を燃料としている。ガスは費用がかかる、しかし、薪や木炭は無料である。従って薪使用か木炭となる場合が多くなるわけである。船上での調理は鶏肉、豚肉を主材としたスープ、焼き魚、ご飯（粘りの少ない長粒米）である。魚は海上での釣りをしている漁師から購入することが多い。とにかく青い大海原、頬を撫でる風、そして降り注ぐ白い陽光に囲まれてのランチは何物にも代えがたい極上の贅沢である。

操舵室は船の中央部に位置している。囲いは全くなく露出していても「室」とは呼べない。ラーメン屋などにある二段のカウンターを想像してもらえればよい。長さが

二メートルほどの椅子に座って操舵する。そのカウンターの外側は一段低くなっていて大人三人が横になれほどのスペースがある。甲板よりは五十センチほど高い。ここが特等席で、海風が通り、視界も良い。しかもエンジンルームの真上に当たるので軽やかなエンジン音が伝わり、しかもエンジン熱がわずかに伝わってくる。エンジン室の熱はダイビングの後の冷えた体にはとてもありがたい。前方三メートルほどは空間となっており、その先は船室となっている。この空間にはテーブルが置かれている。食事の時にはこのテーブルに料理が並べられる。船室の船尾側が入り口がある。天井、前方、両側面は壁となっている。両側面には明り取りがある。船の大小にもよるがこの船室の中では大人が二、三人は休むことができる。しかし、中は蒸し暑く、しかも肋材がむき出しになっているので体を伸ばして休むことは無理である。雨の場合は貴重な避難室となる。また屋根の上は機材の置き場になっている。

船の船尾から中央部、船の三分の二ほどは厚いテント材の屋根が張られている。船尾、船首あるいは船尾から見ると両辺同じ長さの「へ」の字に見える。

「潜る前に果物を食べましょう」

デイノがそう言いながら保冷ボックスからマンゴーを取り出すと錆の浮き出たナイフで二つに分けた。そして分け

善波も笑顔であった。

「ありがとう、善ちゃん。でも私は・・・」

「アミーたちは食べ飽きているか。慣れてしまうと幸せ感もあせちゃうか」

アミーは困り果てたような表情になり、ただあいまいに笑っている。

「善ちゃんの言っていること分らない」

何か批判でもされたと思ったに違いない。

「ちゃんと説明して」

「善ちゃんが言ったことはね、手を出せばすぐにも食べられる物となかなか手にすることができない物とでは違いがあるということ。すぐ食べられるものがありがたみは低く手に入りにくいものはおいしく思える、ということ。少し難しかったかもしれないが、決してアミーを非難したわけではないから安心して」

「あつ、そうか。いつでもどこでも手に入るフィリピン人となかなか手に入らない日本人ではマンゴーのおいしさが違うということね」

六 いざ、ダイビング

アミーは右京の説明を聞いて安心をしたようであった。

たマンゴーの果肉に幾筋もの切れ目を斜めに入れた。果肉面には小さな菱形模様がいくつもできた。そして切り分けたマンゴーをアミーに手渡した。彼女はマンゴーの皮面を押し上げ、山形にした。そしてアルミの皿に置いた。山盛りになったマンゴーの皿をテーブルの上に置くとアミーはとびつきの笑顔で「どうぞ」と言いながら右京と善波に勧める。

二人は「待ってました」とばかりにマンゴーに手を伸ばした。完熟したマンゴーは果汁をいっぱいに含んでいる。かぶりつくと口の端から果汁がしたり落ちる。

「うまい」

と二人は同時に叫んだ。

「マクタンに来たらまずマンゴーを食べないとなあ」

「善ちゃんの言う通り、このマンゴーの甘さは堪えられないね。しかも安いから気兼ねなしにいくらでも食べることができるよ」

右京の顔にも笑みがこぼれていた。

完熟していない青いマンゴーのジュースもおいしい。レモンを絞って入れたこの飲み物は酸味があるが、うっすらとした甘味があり、癖になる。

「人間おいしいものを食べている時が一番幸せな顔をしているよね。アミーも食べて」

感が増していくようであった。

「そろそろポイントに着くので準備をしてくれない。ブーツ、ウェットスーツを着けたら簡単にブリーフィングをやります」

デイノの言葉に右京は胸が高鳴った。彼は船室の屋根に置いてあったスーツとブーツを取るとまずスーツに左足を入れた。次に右足、そして胴体、最後に両手である。ウェットスーツに関して言えば、日本国内では厚さが五ミリ、この地マクタンでは三ミリのものを着用している。両方とも採寸をした上で作ったものである。オーダーメイドである。従って身体にしっかりとフィットしている。特に五ミリスーツはきつく、滑りが悪い。着用は一苦労である。だから大概はスーツの内側に水を入れて滑らかに身体が通るようにする。あまりにきつい場合は海中で着ることもある。ところが同じオーダー製の三ミリの場合はごく簡単に着られる。素材が薄い伸縮性があり、楽に手も足も滑り込んでいく。「楽勝」という言葉がびったりする。

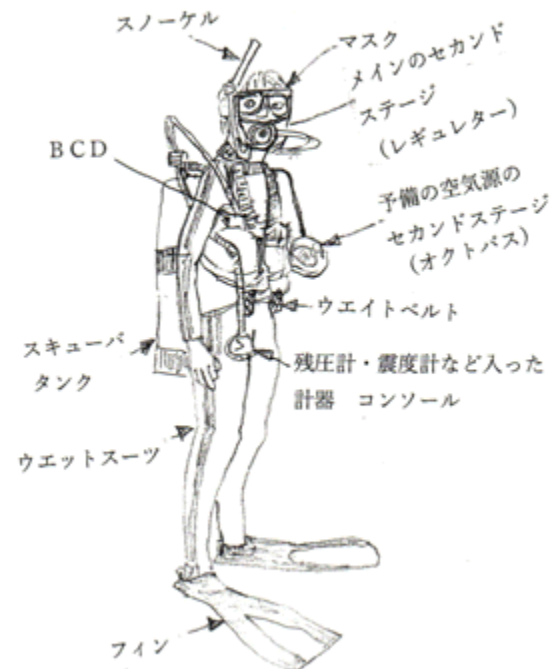
スーツを着終えたら次にウェイト・ベルトである。これは身体が浮かないように鉛の重りを着けるのである。右京は一キロの重り五個をバランスよくベルトに通す。計五キの数は違ってくる。当然のことであるが分かっている

つい失念してしまうことがある。ダイバーは自己の適正な重さをしっかりと把握しておくことが大事である。

船上でゴロゴロしていたスタッフたちは既に動き出していた。BCD（ジャケットのようなスタイル）にタンクを固定し、さらにレギュレーター、オクトパス、残圧計などを装着する。タンクのバルブの開閉の試行は必須である。万一中で空気がうまく通らないなどがあれば生死に関わるからである。このタンクのバルブの開閉、レギュレーターなどのエアの通りなどは人任せにせずダイバー自身でしっかりと確認しておくことが大事である。その他にマスク、シュノーケル、手袋、フィンも忘れないようにしなければならない。さらに通称ツンツク棒（鉄製の五十センチほどの棒）と言われものもサングを痛めないため、また注意や警報の音を発するために必要である。警告とか注視のサインをこのツンツク棒でタンクを叩きメンバーに知らせるのである。

水中では音が空気中より遠くまで伝わるために、陸上だと聞こえない遠くの音まで聞くことができる。また、水中では音が空気中より約四倍の速さで伝わる。従って、このツンツク棒での合図は極めて有効なのである。

さらにダイブ・コンピュータも必携である。ダイビングの終了後には「ログ付け」を行う。海中での観察内容、反省点、そして水深、水温、潜水時間などの記録を行う。こ



器材等装着図

船が沖に向かうにつれ海の色は変化していく。薄いブルーが次第にその色を濃くし、それと共に海の神秘さ、豊穡

の水深などは全てダイブ・コンピュータに記録されている。従ってこのコンピュータは記録保存の上でも重要である。また綱や綱が絡まったりした場合にはナイフもが必要である。しかし、初心者には無用である。持っていて有効に使いこなせないからである。もし緊急事態が起きても直ぐにインストラクターが助けてくれるからである。

船は規則正しいディーゼルのエンジン音を上げ快調に進んでいる。波は穏やかでマストに掲げられている古びたフィリピン国旗がはためいている。外から容易に見えるエンジンルームのディーゼルエンジンは「ISUZU」製の中古品である。全てを確かめたわけではないが、ほとんどの船のエンジンは日本製、しかも中古品であるという。この地の日本製に寄せる信頼は極めて強い。車にしても日本ではあまり見かけない三菱やいすゞ製の四駆自動車や圧倒的な存在感を誇っている。道路事情があまりよくないこの地では日本製の四駆は極めて力強い存在になっているのだ。

船のこの力強いエンジンは大海の波を割り、砕き、裂く。雄々しくさえ見える。四方見渡す限りの大海原を疾駆する船には畏敬の念さえ抱いてしまう。そしてこの息をのむような光景は広大無辺にして妙なる神の御業とさえ思ってしまうのである。

時折船の前方や側面にイルカが姿を現すことがある。前

方のイルカはまるで船を先導しているかのように見える。数頭の群れの場合もあるし、十数頭の大きな群れの時もある。また側面を伴奏するイルカに向けて船べりを叩くと、まるで挨拶を返すように頭部を上げたり、ジャンプをしたりする。彼らが進むずっと先には天と海とを画するどこまでも真つ直ぐで鮮明な水平線が続く。同時に白い雲が浮かぶライトブルーの天とエメラルドブルーの大海は青という色を共有している。しかも無辺の天と海は人の心を抱き、癒すことと限りない。誰をも受け入れ、拒否しない。そこでは人は誰しもが無限なる恩恵に浴することが出来る。

スーツ、ベルト、ブーツ、手袋、ダイブ・コンピュータを身に着け、フィン（足ひれ）、シュノーケルの着いたマスクなどを持ち、右京たち三人はインストラクターのデイノがいるテンプルに集まった。

「今回のダイビングポイントは既に話したように『ゼロ戦ポイント』です。最大水深は十五メートル、潜水時間は五十分を予定しています。エア圧力が八十^キになったら知らせてください。流れは強くありませんのでゆっくりいきましょう。先頭は私・デイノ、次に善ちゃん、右京さん、そして最後尾がアミーです。何か異常があったら右手を水平に振ってください。それからエントリー（海に飛び込むこと）順は私、アミー、右京さん、善波さんの順で行きます。着水し

たら直ちに船から離れてください。次にエントリーしてくるとぶつかったら大変ですから。全員海上に揃ったら潜降します。そして着底したらエアチェック、マスクのフィット具合、ウエイトベルトの締め直しをしてください。それと完全装備しての船上移動はカニ歩き、横移動です。潜る前にケガでもしたらこんな残念なことはありませんからね。それから大事なことです。海中では呼吸は止めないこと。常に息を吐くようにしてください。以上でブリーフィングは終わりです。質問は？ ありませんね。それでは船首に移動して装備を身につけて」

何千回と潜っているデイノである。そのたびブリーフィングしている。説明は滑らかなのは当然であった。船首の平らな甲板のへりから先程の説明順にエントリーした。エントリーの方法はジャイアントストライド・エントリー（※1）である。甲板から海面までは優に二メートルはある。初めての場合は恐怖を感じる人もいる。しかし、一、二回と経験を経むほどに逆に快感を覚えるようになる。

全員が海面に顔を揃えたのを確認し、潜降に入った。この時にBCDにエアが残っていると潜降はむずかしい。それだけにエントリーする前にBCDのエアを抜き切ることが大切になる。また、個人差が大きいのだが「耳抜き」（※2）がうまくできるか否かによって潜降の良し悪しも

決まる。右京は慢性鼻炎があり、そのせいか耳抜きがうまくできず、時に耳が強烈に痛くなることがある。このようなことを避けるために潜降する前にガムをかんだり、鼻をつまんで息を吐くようなことをやっている。また、日頃からあごを動かしたり、つばを飲み込んだりしている。どうしても痛みが取れない場合は痛みが消える水深まで浮き、改めて潜降をやり直すようにする。潜降中は視線を着底する場に置き、あわてずゆっくりと潜降をする。

日光は深さ十メートルまでは十分届く。海中に入った光は時に揺らめき、海底の植物や藻を明るく浮き立たせる。頭上に浮いているボートの影が海底に映されて、そこに何か別な生き物が横たわっているのではないかと思わされる。船は船底しか見えない。まるで別物で幻影をみているような気にさせられる。三十度ほどの海水は冷たいなどと言うことはなく、むしろぬるいお風呂の水という感じである。ありがたいと思う反面、これも地球温暖化の影響だと思うと単純に喜んではおられない。

右京がかつて十月に日本の伊東の白根ポイントに潜った時には海水温二十三度、気温は二十五度であった。ウエットスーツの厚さは五^ミであったが十分間ほど潜っていると体が冷えてき、五十分間ほど潜って浮上した時には寒さで全身が震えた。それに比べるとマクタンのは水温が高く、

大げさにいうと汗をかいてしまうほどであった。海水温としてこの三十度はサンゴには大敵で、このためサンゴの白化現象（サンゴの死滅）が起こっている。「白く」と化したサンゴが一面に広がる様はまるで死屍累々たる砂漠を連想させる。悲しく、そして申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

ダイビングでは着底したときや、海底すれすれを泳いでいる時に誤ってフィンでサンゴを傷つけることがある。また、避けきれずに手でサンゴを突いたり、つかまつたりして折ってしまうことがある。故意ではないのだが、浮力のコントロールがうまくできない初心者の場合はそのような事態を起こすことがままある。十分に注意をしなければならぬと右京は自らを振り返り強く思うのである。

全員が着底し、輪になる。デイノはマスク、レギュレーター、オクトパス、ウェイト・ベルト、フィンを順番に指し、それぞれの安全を確認するようにさらに指示した。

右京はいつものことながら海中に入った途端に軽い興奮を覚えた。そして、同時に何やら故郷に帰って来たような安堵感を覚えるのだった。海に、水にほんわかと抱かれ、悠久の時にたゆたうように心がなごみ、身体がほぐれたような心地になるのである。地球上の全ての生き物の始原は海からである。海が命を産み（海）育てた。いわば「母な

る海」と言っても過言ではないのである。右京が母体に帰したと感ずるのも自然なことであるのかもしれない。あるいは身体のDNAが瞬間その記憶を取り戻し、目覚めたのかもしれない。

デイノが「レッツゴー」と言うかのように右手の親指を立て、前方を差し示した。そして身体を横にするとゆつくりと足ひれ（フィン）をキックした。彼の身体は斜め上になつて静かに進む。スクリューとエンジン音が遠くに聞こえ、そして次第に消えて行つた。その人工音が消えると右京たちの小世界はタンクからの空気を吸う音、そして吐く息と泡となつて上昇する音以外は全くの無音になつた。その上、身体は抵抗なく自由に水中遊泳ができる。水深は十メートルである。海中では十メートル毎に一気圧の負荷がかかる。従つてこの深さでは地上の一気圧分を加えると二気圧の負荷がかかっていることになっている。しかし、そのような負荷は一切感じない。

水深五メートルから右京たちはゆつくりとなだらかな傾斜に沿つて深場の方へと進んでいく。砂地と海生植物の場がいつしか消え、サンゴがゴロゴロと広がる海底をさらに前方へと進む。すると視界が開けた先にテールサンゴの群れが広がっていた。しかし残念ながら白化が進んでいた。「悲しみのサンゴ群」という言葉が右京の脳を過ぎつた。

そんな沈んだ気持ちの右京の前を進む善波が、盛んに頭を左右に振っている。恐らく魚の姿を探していることであろう。右京は、はつとなり目を凝らす。そしてゆつくりと右、左と視線を向ける。右京も善波同様に回りの景観を楽しむように視線を動かした。その視線を邪魔するものがマスクのグラスに見えた。どうやら少し海水が浸み込んだようであった。彼は右手の人差指、中指の二本でマスクのへり上部を押さえ、頭を反らし上方を見る。そして鼻から息を出した。それを二度繰り返した。マスクの中の水は鼻から出した空気に押し出され、泡と共に水中に消えた。マスククリアも上出来であった。

右京たちはサンゴ礁のへりに沿つて進んでいる。サンゴ礁でできた島はその沖合数十メートルまでは遠浅となつてゐる。清澄な暖海でもある。しかし、その遠浅が終わった縁はいきなりドーンと垂直な崖（クリフ）となつてゐる。数十メートルあるいは数百メートルに及ぶ深さである。この深さに見えていると実は大変なことになる。右京が実際に体験したことである。目を下に向け眺めているといつしかえも言われぬ幸福感に包まれてくるのである。実はこの時右京は静かに、そしてゆつくりと潜降していたのである。眼下は真っ黒な世界である。対象物がないため下へ落ちてゐることが自覚できなかったのである。しかも、三十メートル以上の深さ

（身体は四気圧の圧力を受けている）になると人間の思考の働きは一気圧の地上に比べ七十％しか機能しないという。右京の危ういこの状況に何が、そして誰かがシグナルを送つてくれたのである。彼はそのシグナルに従いダイブコンピュータ（※3）を見た。何と水深は四十メートルを示していた。無意識のうちにこの深さまで潜降していたのである。一瞬慌てた右京であったが、気を取り直しゆつくりと浮上した。もし慌てふためいて海水面まで一気に浮上しておれば潜水病（※4）にかかり、下手すると死んでしまうかもしれないのである。

上げた顔を左斜め上に向ける。白く輝く光の世界がわつと彼の目を襲つてきた。海中に差し込んだ日の光はただただ真っ直ぐに射込み、広がり、そして拡散している。それは「誰をもはばからず燦爛と注ぎ込む光の世界」という表現がぴったりのように思えた。今、右京たちは空気の世界から水の世界へと転じてゐる。空気を送り出すレギュレーター一つを外されれば死の世界に直結する。常在戦場という言葉があるが、ここはまさに常在恐怖と言える。しかし、右京にはその感覚は全くなかった。むしろ神からの恩寵に浴しているかのような至福感に包まれていたのだった。

視線を前方砂地に向けると大小さまざまなサンゴや岩礁がゴロゴロと横たわっている。そしてそこにまるで湧いた

ように小さな、そして色様々な熱帯魚が群舞していた。その群れに両の手で水を押しやるとワツと散らばる。しかし数秒もするとまた群舞し始める。じつと眺めていると海中にしていることを失念してしまう。「命輝く」という言葉が右京の脳裏に浮かんだ。彼はまさに「命を眼前」という貴重な体験をしていたのであった。

フィンを二掻かきする。熱帯魚の群れが二つに割れ、できた水の道を彼はゆっくりと進む。視線を落とす。落とした先にくつかのイソギンチャクが岩にしつかりと食いついている。白い触手が流れに揺らめいている。揺らめく触手の間から黄色のクマノミが出たり入ったりしている。目の後ろ辺りをぐるりと白いテープを巻き付けたような模様が笑いを誘う。右京はその頭を撫でようと手を伸ばした。するとクマノミは逃げるどころかツンツンとくちばしで突いて来、侵入者を撃退しようとしているのだ。その果敢な戦闘精神に右京は脱帽してしまった。そして「一寸の虫にも五分の魂」という諺が思い出された。クマノミは文字通り身を挺して卵を守ろうとしたのである。「あつぱれクマノミ」と、右京は声なき声を出したのだった。

カンカンという金属的な音が右京の耳に届いた。直ぐにダイノの発信音ということを知った。右手前方、五メートル先でダイノが半身を起こし、顔を後方に向けて手招きしている。

面に向かったとしたら潜水病になってしまうかも知れない。また、亀を驚かすことは一種の暴力行為である。そう思うと、右京は静かに亀から離れた。その瞬間である。亀は右京の心を察したかのようにゆっくりと海底から離れ、そして泳ぎ出した。亀の影が海底に映しだされ、段々と小さく、そして米粒のようになり、そしてそれはあつという間にスカイブルーの霞の彼方へ消えてしまった。右京は消えた亀に「バイバイ」と心の中でつぶやいた。

善波が右京の近くに寄って来てタンクを叩いた。右京が振り返ると善波は両手を何回も大きく広げてみせた。しかもマスクの中の目は大きく見広げられ、彼の感動の大きさを表していた。それは右京にしても同然であった。

善波の所に近づいて来たアミーはやはり両手を何回も広げ、そして親指と人差し指で丸を作り、前後に叩くように幾度も振った。彼女も喜びを分かち合ってくれたのであった。右京は目を海面に向けた。瞬間目を閉じてしまった。そして、「うっ、まぶしい」という言葉がこぼれ出た。光が射入する辺りにはまるで白い繭玉のように波がたゆたい、そこからまた陽光が無数に別れ放射状に海底へと拡散している。まるで光のシャワーのようであった。背に光を受けて大小さまざまな魚が乱舞している。下から見ている右京にはその魚は黒い粒と見えるのである。無秩序に乱舞して

「何か見つけたに違いない」と直感した右京は、フィンを交互に強く掻いた。彼の前方にいた善波に追いつくと右手親指を立て、やはり前方に数回振った。善波も得心し、右京の後ろからダイノに向かった。

ダイノがツンツク棒で指し示す方向に目をやると、そこには巨大な畳二枚はあろうかと思われる亀が岩礁と岩礁の間に鎮座していたのだ。右京は刺激しないようにゆっくりと停止し、静かに着底した。そして腹ばいの姿勢になりじつと観察をした。背中の甲羅には苔やフジツボらしきものが生え、足びれには数本のひっかけ傷のようなものがあった。また、目は薄い透明な膜がかぶさっており半睡でもしているようであった。それが亀の表情をぼんやりとさせていた。右京は少しずつにじり寄り亀の様子を詳しく観察しようと思った。近くで見るとやはり亀は巨大で丈は二メートル、幅は一・五メートルあるように彼には思えた。しかし、水中では全ての物体は光の屈折により三十三%増大して見えるという。そのことを念頭に置けば実際の丈は一・四メートル、幅は約一メートルになる。右京はそんなことを考えながら、それでもにじり寄っていった。

「亀に乗ってみたい」

突然、そんな欲望が湧いて来た。しかし、そんなことは無謀である。もし、亀が驚いて猛スピードで泳ぎ出し、水

いるように見える魚たちだが、実はきちんとした規律をもった行動をしているのが分かる。同種の間は同種同士、そして瞬間の方向転換もリーダーらしき魚に従っているのだ。種の保護のために最大の知恵を発揮し、最も適切な行動力を身に着けているのである。しかし、群れの退避行動を見ているとその見事さ、華麗さに魂が吸い取られるような思いになっていくのであった。数えきれないほどの熱帯魚の群れが盛んに遊泳している。時に身を翻した魚が陽光を受けキラリと光る。また横から光を浴びた魚たちは赤や黄色、ブルーの色を惜しげもなく披露している。この群舞はまるで右京を竜宮城へいざなうかのような光景であった。「幸せだ」

そう思った瞬間、右京の目頭が熱くなった。そうしてもう一度彼は「幸せだ」と、ゆっくりとその言葉を噛み締めるのであった。

ダイノがまたタンクを叩いてきた。皆の視線が彼に集中した。彼は親指を立て「グッド」と言うかのように何度も振った。さらにその指を前方に向けて振った。「前に行こう」というハンドル・シグナル（手、指による合図）であった。

人間は「感情の動物」と言われる。他の生き物に比べ喜怒哀楽の気持ちが激しい。右京は先程の大亀との遭遇で気

分が高揚し、それにもない活力も充実してくるような気分になった。このことは極めて有益なことであった。特にダイビングのような非日常の環境で行うスポーツには少しの感情の揺れで大事に至ることがあるからである。活力が身体に満ちて来るということは運動能力の向上でもあり、気持ちに余裕が生じることもあった。それは善波にしても同様であった。

水深も徐々に増していった。ダイブコンピーターは七メートルを示していた。さらにゆつくりと水深を深めていく。サンゴのように赤いソフトコーラルが海水の流れを受けてゆらゆらと揺れている。さらに進む。目の前に小さきまざまのサンゴの広場が広がっている。しかし悲しいことにこれらもサンゴの白化現象が進んでいる。その上を白地に六本の縦じまのタカハナダイの十数匹の群れがゆつくりと泳いでいる。足元にはガンガゼ（長く鋭い有毒のトゲを持つウニ）の群れである。右京は触れないように注意をする。海面すれすれのところを群れから離れたのだろうか、一メートルほどのバラクーダ（体は細長く、口先は槍のようで歯が鋭く危険）が過ぎて行った。五、六年ほど前には数十、数百匹の群れが容易に見ることができた。しかし、乱獲や環境悪化により大きな群れはなかなかみることができなくなっている。

以前、この地ではダイナマイト漁法が行われていた。これはサンゴの植生や魚たちのすみかを破壊する極めて乱暴で問題のある漁法であった。この漁法では漁師が手を飛ばされたり命を失ったりすることもあったという。こういうこともあり、この漁法はだいぶ以前に禁止となっている。他に問題となっているのが熱帯魚の捕獲である。これは主に先進国の人達からの需要で成り立っている捕獲である。熱帯魚の群れの所に死なない程度の薬剤をまき、魚を仮死させ一網打尽するというものである。しかし、「死なない程度」とは人間が勝手に決めた基準である。予想外の数の魚が死んでしまうこともあるに違いない。実際、現実にはかなりの数の魚が死んでいる。また、待機飼育中や輸送途中でも死ぬ。捕獲された熱帯魚の数は消費者に届くまで大部分が死に、生存できた数はわずかであるという。人間本位の残酷な捕獲方法である。美しい熱帯魚の姿、熱帯魚を愛する消費者の姿の背後にこのような無残な、そして悲しい話が潜んでいるのである。

デイノが「ゆつくり進もう」と言う合図を送って来た。ポイントに近づいたに違いない。そう右京も善波も感じた。ゆつくりと前方に目を凝らす。透明度は十五メートルほどである。「やや良」という感じである。前方を進むデイノが手招きをした。右京は残圧を確認した。ここでエア切れ（タンク

の空気が少なくなるか無くなる寸前）になつては悲劇である。幸い残圧は百二十kg/cm²で、現在までの消費は八十kg/cm²である。水深は十二メートルで、透明度も変わらない十五メートルである。「問題はなし」と、右京は自身を元気づけるかのようになに心の中で大声をだした。勿論実際に声を出したわけではない。声を出そうにもレギュレーターをくわえている状態ではできない。

デイノが再びタンクを叩いてきた。右京たちが彼の方向に目を転じると、デイノはツンツク棒を真っ直ぐ前方に向けていた。右京はツンツク棒の先に目を凝らした。彼はデイノが「ゼロ戦」を見つけたのだろうかとう咄嗟に理解した。やはりそうだった。先にうつすらと大きな物体の形が見えたのだ。

善波も興奮しているようであった。レギュレーターから盛んにブクブクと気泡が出ている。興奮のせいでエアの消費が多くなっているのだろう。「慌てない方がいいのだが」と、右京は思った。しかし、彼自身もフィンを振る幅は大きかった。そして海面に向かう泡は大きく途切れなかった。「他人の欠点はよく目につく」ものである。

「ゼロ戦」ではなかった。近づくとも明らかに双発の飛行機であった。しかも、エンジンは既になかった。恐らく現地の人間がはぎ取ったのだろう。しかもゼロ戦に比べると

大きかった。さらに観察をすると、風防もドアもなかった。操縦室内の計器類もきれいさっぱりとなくなっていた。まるで追いはぎに身ぐるみを剥がされたような状態であった。デイノの話によると、この飛行機はアメリカの民間機だという。エンジントラブルにより不時着したのであった。しかし、見事な不時着ということもあって乗組員全員が救助されたという。戦後すぐのことであった。

翼を擦るとアルミの下地が現れ、銀色に光っていた。鉄に比べ腐食しにくいのがよく分かった。右京も善波も魚たちが機体の中をすみかとしているのではないか思っていた。どんな魚が見られるのか、ひよつとしてハタのような大物がいるのではないかと期待をしていたのである。ところが泳いでいたのは黒つばい、体長四、五センチほどのイチモンズメダイの小さな群れだけであった。右京、善波たちは完全に肩透かしを食わされたのだ。

しかし、と右京は考えた。もしこれが本当にゼロ戦であったら、操縦士は捕虜か戦死したかのどちらかである。戦勝を祈願して一身を捧げた勇者に対し、こんな風に趣味、遊びの一環としてホエールウォッチングのように見ることはできない。もし見たとするならば「不敬」とばかりに「うごうたる非難をあびることは必至であろう。現実には機体が発見された時点で引き上げる措置が計画され、時を置

かずに引き上げられたに違いない。そして操縦士は手厚く靖国神社に祭られて慰撫・鎮魂されただろう。

マクタン島へ訪れる日本の観光客は多い。そのうちのかりの人々がダイビングをしていると思われる。日本人の「ゼロ戦」（旧日本海軍の零式艦上戦闘機）に対する思いは信仰に近いものがある。フィリピンのダイビング業者がこの日本人のゼロ戦に対する思いを商売に利用することは容易に考えられる。現にゼロ戦と似ても似つかぬものをダイビングポイントとしているのである。右京たちもそれにまんまと乗せられたのである。

しかし、だからと言って「詐欺だ」と青筋を立てるのも大人気無きことである。おチビちゃんのイチモンズメダイがお迎えしてくれただけでありがたい。その思いはこの熱帯魚など全てへの感謝でもある。右京はそう心に刻んだ。「ゼロ戦観察」は七分ぐらいの間であった。デイノが皆に「帰るぞ」とのシグナルを送ってきた。帰路は流れに抗してであった。風で言えば「向かい風」である。しかし、流れは弱く、ゆつたりとした気持ちで進めた。潜降地点に近づくと船の黒い影が白い砂地の海底に落としてあった。海水も暖か、頭上からの日光、心は満足感に満ち、右京は満ち足りた心になっていた。

浮上である。既に確認してあった通り善波が一番先に浮

空気が直接彼の肺腑に送り込まれる。まるで肺がクリーニングされたように新鮮な気持ちになった。レギュレーターよりもシュノーケルの方がずっと呼吸が楽であった。しかし、ちよつとした波の高さでもシュノーケル内に海水が入ってくる。この点は要注意である。

船からは梯子が落とされていた。それを使って船に上がるのだ。梯子に足を掛け上るのは結構大変である。海中から身体を水面に出した途端に身体が突然に重くなるのだ。水中での浮力が瞬間的にゼロとなり、重り、身体やBCDの重さが負担となって身体にのし掛かって来るのである。善波は既にお尻を階段の上に乗せた。彼もまたここで一息を付いている様子であった。大きく呼吸をしている。肩が上下に動いているのが見えた。

アシストするアミーが善波の足からフィンを、次に重り、そしてBCDをと順に外している。外したものに船上のスタップが手を伸ばして受け取っている。これで善波の身体はグンと楽になったはずである。右京が思った通り、善波は軽い足取りで階段を上り、ひょいと甲板に立った。着くや彼は手を後ろに回し、スーツのファスナーを一気に外した。そして、濡れた頭をブルン、ブルンと振った。光を受けたしずくが輝きながら四方に飛んでいるのが望みできた。右京はそんな善波に柔らかな笑みを浮かべた。そして「随

上する。そして右京がそれに続く。耳を澄ます。特に他の船のエンジン音に注意をする。また、頭上の水面辺りにも注意を払って他のタイバーや障害物などのあるなしの確認をする。さらにダイビング・コンピューターにも目をやる。水深五メートルの所で三〇五分間安全停止（※5）をする必要があるからである。この安全停止は結構技術を要する。浮かず沈まずという中性浮力（※6）の技術を体得していなければならない。初心者にはかなり難しい。

右京が水面から顔を出すと波は潜水時より高くなっていた。高いと言っても五十センチ程度ある。それでも彼の視線の邪魔をし、船の上ならばすぐにでも確認できる他船の姿が見えない。ほんのわずかな高さの波で、遭難者は前方の視界は限られてしまう。それは船の方にも言えることである。遭難者の発見は波が障壁となつてかなり難しいのである。浮上したらバラバラになるのではなく「集まれ」と、教えられたことの意味が右京にはよく理解できた。バラバラでは発見が一層難しくなるか、あるいは時間を要するからである。

浮上した右京はさすがにほつとした。そんな気持ちが彼をリラックスさせた。ゆつくりと四方を眺めた。空と大海原が広がる風景に彼は心が震えるような喜びを感じた。右京はレギュレーターを外し、シュノーケルを咥えた。外界の

分とダイビングの腕を上げたものだ」と、心の中でつぶやいた。そんな右京に彼は気を取られることもなく、今度は両手でつると顔をぬぐった。上げた顔は満足そうであり、爽やかな表情でもあった。右京も海水を両手で掬い、ざぶりと顔を洗った。唇の端に残った海水を舐めるとやはり塩辛かった。

右京も船上に戻った。彼はフィンと重りを外し、アミーに渡すと階段を上った。わずかに五メートルほどの長さの梯子であるが背負ったタンクとBCDがずしりと肩に食い込み、身を下にひきずりこもつとしているように感じた。ようようの思いで船上にたどり着いた途端、右京は思わず甲板に両手をついてしまった。そして「ハァー、ファー」と、息を荒げてしまった。全身の力を海の中で使い切ってしまったような感覚だったのだ。まさに疲労困憊の一言に尽きる状態であった。しかし、心は善波同様に満ち足りていた。豊饒な海から返しきれないほどの幸を受けたような気分であった。手をついたまま右京が顔を上げると、香^{かぐわ}しい香りが彼の鼻腔をくすぐったのだ。

船のスタップたちが既にご飯を炊き終えていた。しかも直径三十センチほどの大皿二枚にご飯を盛り、テーブルの真ん中にどかりと置かれていた。焼いた魚とポークが乗せられた皿も人数分置かれていた。鳥スープレの鍋はまだかまどの

上であつた。「冷えた体に熱いスープを」というスタッフの配慮なのだろう。その匂いが辺りに漂っていたのだ。二人のお腹がクークーと鳴いた。

「先にログ付けをしましょう」

デイノ声であつた。

無情にもデイノの一声が彼らの食い気に蓋をしてしまったのである。右京と善波はお互いの顔を見合つてしまった。何か言いたそうな顔つきであつたが二人は黙つて苦笑いをするだけであつた。しかし、食後に何かをやるうとしても「やれない」「やらない」という気持ちになることは二人ともよく知つてゐることであつた。デイノもそのことを十分知つた上での一声であつたのだろう。しかも「面倒と思うものほど先にやる」。これは先人の教えでもある。

ウェットスーツを脱ぎ、Tシャツと短パンに着替えた二人はログノートを持ちテーブルの椅子にどかりと腰を下ろした。アミーがサンミゲル・ビールを持つてくるとボンと栓を抜き、デイノと右京達二人の前に置いた。アミーはコカ・コーラであつた。

「お疲れさんでした」というデイノの声に合わせ、四人は乾杯と唱和した。右京はゴクリ、ゴクリとビールを口に入れた。冷たい液体が喉、食道をゆつくりと通過し、そして胃の腑に落ち着くのを右京は感じた。「ああ、うめえ」と、

七 船上のランチ

待ちに待つたランチがようやく始まつた。テーブルの中央には直径三十センチほどの皿二枚にどつさり盛られたご飯が鎮座。「とても食べられやしない量」である。しかし、心配はない。実は船のスタッフたちがそれを待っているのである。そして、ごはん皿を取り巻くように鳥のスープ、焼き魚、焼き豚が置かれている。さらに銘々皿とスプーン、フォーク、カップが置かれている。これらの料理に花を添えるようにカットされたマンゴー、パイナップル、マンゴースチンなどが並べられている。右京も善波もこんな豪華なランチは生まれて初めてであつた。

フィリピン料理に欠かせないのがフィリピン魚醤のパテイスである。魚を塩漬にし、発酵させて作る。独特の香りがする。それでこれを嫌う観光客もいるが右京たちはこれにすっかりはまつてしまつてゐる。このパテイスにはカボスのしぼり汁や赤や青の唐辛子を刻んで入れると抜群である。この魚醤とご飯だけで朝食を済ます家族も多い。

肉類では鶏肉が一番おいしい。放し飼いにされている鶏はいたるところで見受けられる。しかし、養鶏場は見たことがない。一億二千万余の人口を誇るフィリピンである。

思わず声を出してしまった。他の三人も「うめえ」と口を合わせた。

カモメが一羽急降下爆撃のように接近してきた。「衝突」と思つた瞬間カモメは身を翻し、急上昇して船から離れて行つた。その後に、キエー、クエーという鳴き声が青空に点線のように残つた。カモメも匂いにひかれて寄つて来たのか、と右京は思つた。

ログ付けの概要は次のようなものであつた。

- ・ 気温三十二度、水面三十度、水中三十度 ・ 透明度 縦、横共に十五メートル
- ・ タンク圧力開始前二百kg、cm、終了時八十kg、cm ・ 水深平均八、三メートル 最大十七メートル
- ・ 潜水時間六十七分 ウェイト（重り）五kg アルミタンク、三ミリスーツ
- ・ 海中環境、そしてダイバーたちの状態は良好であつた。
- ・ 観察記録 大亀。クマノミ、スズメダイ多数、タカハナダの小さい群れ、バラクラダ。ソフトコーラル、サンゴは大部分白化
- ・ 双発飛行機の残骸、ゼロ戦とは似ても似つかない。

放し飼いの鶏ではとてもその需要を満たすことはできない。右京達観光客には目につかないところに養鶏場があるに違いない。この鶏を路上で丸焼きにしている場面をよく見る。首を落とされ、羽をむしり取られた裸の鶏が数羽串刺しにされて炭火の上で回転しているのだ。ウナギの蒲焼よろしく何回もタレをつけられたハダカンボウの鶏はピカピカと光り、実においしいそうなのである。実際、おいしい。病みつきになる。

牛肉は固く、おいしいと思つたことはあまりない。勿論高級料亭にでも行けば話は違ふのだろう。この地では牛が街中や住宅街の草地などに放牧されている姿をよく見かける。それらの牛はおしなべて痩せこけて見える、腰骨や胸骨が気の毒なぐらいに浮き出ているのだ。これらを見ているせいもあるのかもしれない。食事とは関係ないが、この地ではほかにヤギも放し飼いにされている。とても餌があるとは思えないようなアスファルト道路やゴミ捨て場めいたところで夢見るような目をしてのんびりと歩き回つてゐる。これも骨が浮き出ている。それでも腹が空いたと鳴き叫ぶ様子はさらさらしない。親子でガレキのつぺんに上り、眼下を見渡しているさまはまるで帝王のような風情である。犬も放し飼いである。総じてのんびり、ゆつくり、のたのたという形容がぴったりである。しかし、ガイドブックな

どには「狂犬病」の虞がある、と書かれている。要注意でもある。

この地で豚を飼育している風景は見たことがない。右京がミンダナオ島のダバオに行った折、山間部に住む日系の二世、三世の人を訪ねたことがあった。十畳ほどの竹材で建てられた家は実に粗末なもので、その苦境に涙を禁じえなかった。日本人の血を引く物的証拠がないため保護も受けられず、無国籍のままですごしているという。この家は高床式の家で一階に当たる部分には豚が飼育されていた。驚いたのだが二階の居住部分にトイレがあり、その排泄物を豚が食しているのだという。一種の食物循環であるが、近代生活に飼いならされた身には受け入れがたいものがあった。

右京にはこの印象があったものであるからマクタン島でも同じようなことがなされているのかと思っていた。しかし、そのような風景を見たこともなく、また地元の人達に聞いてもそのようなことはないという返事であった。そんな記憶があったものだから右京にはこの地での豚肉を食するのを敬遠することがあった。しかし、実際に食べてみると牛肉よりはおいしく感じた。

フィリピン料理で豚と言えば外せないものがある。豚の丸焼きである。レチョンという。豚を一頭を丸ごと炭火で焼く。

向かいのデイノを見ると彼は箸もフォークも捨て右手で食べているのである。このシーンを右京は幾度も見ているので驚きはしない。しかし、デイノのその手、指使いが実に見事なのである。右手の親指、人差し指、中指をご飯の上に持つて行く。とその三本の指でご飯を上手に丸め、それをさらにスープや肉などと混ぜて丸める。そして、ポイと口の中に掘り込む。あまりに見事なのでデイノの手元を凝視してしまった。「京ちゃん、何か」と、デイノは問いかけてきた。「いや、上手に食べるから感心して」と、右京は笑顔を浮かべながら答えた。「じゃ、京ちゃんもやってみたら」というデイノの声に、おもむろに右京も真似をしてみた。

ご飯を皿に取っておかずと混ぜて、丸めて、ポイ。なかなかリズムがあつて調子がよい。右京は「この食べ方は船上のランチには最適」と思った。そして長粒米であるインディカ米に粘りがないことも理解できた。もし、日本米のように粘りつがある指で丸めた時に米粒が指のあちこちにへばりついてしまう。これではスムーズに食事が進ま

焼き上げた料理で、お祭りやと特別なイベントには欠かせない料理である。皮はバリバリ、肉はジューシーで地元の人々には大人気である。

しかし、実際に食すると皮はまだしも油が垂れる肉は一口二口で「ごちそう様でした」と言いたくなってしまう。これは食べる環境にもある。このレチョン料理の場合は一族郎党が、また近所の者たちも集まって来る。狭い一室でひしめき合いながら、しかも、四十度を超すようなムンムンとした部屋で食するのである。それに対象となるレチョンは超脂っこい。大概の日本人はほんの少しで箸止めとなってしまうのである。それに焼かれた豚の姿に哀れみを感じてしまう。「解体ショー」を喜んで見、食する民族が「何言うか」と言われれば「ハイ、それまでよ」となってしまうが、これは長き食文化から来る帰結であるから理屈ではどうしようもない話である。

食生活の習慣のことで右京が教えられたことがもう一つある。それは食べ方である。日本人の多くは箸を使う。欧米人はスプーン、フォーク、ナイフを使う。ちよつと大ごとである。ところがフィリピン人は手だけで食べることがある。実際にはタイなどの南アジアでも見られる風習だ。

卓上に並べられた料理を右京たちは「おいしい、おいしい」と言いながら食べる。スープは鶏の出汁がしっかりとなくなる。食事が楽しいものではなく、苦行になってしまう。

俄然興味が湧いた右京はデイノを真似て手で食べ始めた。ご飯粒とおかずを丸めることに戸惑ったが、直ぐに慣れてきた。「なかなか乙なものだ」と、彼は感心してしまった。

右京が特に感じ入ったのは、口ばかりでなく指でも食物の感触を得られることであつた。フォークや箸で食している時は食物の味、感覚は口だけに限定される。しかし、直接指で食物に触れることによって指での味わいと言うものを得られことになるのである。日本人の感覚によれば、その食生活習慣から手で食べることは「行儀のわるいこと」と否定されてしまう。しかし、その習慣を越えれば新たな「味わい」を得ることができるのである。これは新しい発見である、右京は楽しくなり、心が弾んだ。

「善ちゃんも試してみたら」

右京は善波に勧めた。

「いやあ、僕は遠慮しておきます」

右京は善波の返答を当然だと思った。彼は几帳面な性格であり、従つて清潔さにもいつも意を払っていたからだ。

「この手で食べる時には十分に手を洗わなければならない」

右京は善波の答えから学んだのだった。

「皆さん、デザートにも手を伸ばしてください。おいしい完熟果物です」

アミーが善波と右京に勧めた。

その声を潮に他の食べ物船のスタッフたちに片づけてもらった。

「スタッフたちに十分行き渡る量だな」

右京は心の中でつぶやき、そして、

「ようし、今度は果物に挑戦だ」

と、大声で叫んだ。その声は青い空に溶け込んでいった。船のスタッフたちが片付け終わるとコーヒーを出してくれた。実に至れり尽くせりである。「ありがたい」右京は真実そう思った。

「今度、オランゴ島にいきましょう」

突然ディノが言い出した。

「オランゴ島のスバ村は私の父の実家があります。ココナツの林がいっぱいあります。木から採って果汁が飲めますよ。おいしいです」

ディノの言葉に右京は「日本兵の蛮行」というディノ話を思い出した。

「行きたいね。それにディノの老家があるところを一度見てみたい。どう善ちゃん」

「ぼくは大賛成ですね。潜るのもいいけどせっかく遠いこ

の地まで来たのですから現地の人達ともっと触れ合いたいです。それに学校の様子も知りたいね」

「善ちゃんの方が乗り気だ」と、右京は内心驚いてしまった。

「学校は実家から直ぐのところにありますよ。訪問したら子どもたちが大喜びをします」

「じゃあ、決まりだね。それでは半年後、子どもや地元民のみなさんの交流をメインにしましょう」

アミーは殊の外うれしそうであった。やはり他国の者が自国の民や子どもたちを大切に思ってくれることは心の琴線に触れるものがあつたのだろう。

また白いカモメが飛んで来た。今度は十羽ほどである。船の周りを旋回している。食物をねだっているのかもしれない。その群れの向こうに小さな島が見えた。無人の白い砂浜が延々と続き、鬱蒼とした緑の木々がまるで帽子を被っているように島を覆っていた。

(続く)

(注) この作品に登場する人物、組織、機関名等は全て架空のものです。

※1 ジャイアントストライドエントリー…スキューバ

ーダイビングにおけるエントリー（海に入ること）のひとつ方法。船べりなどの端に立ち、足を大きく広げ、背筋を伸ばして入る。その際、マスクの全面と後頭部のストライドを手でしっかり押さえる。

※2 耳抜き…水圧や気圧の変化によって、中耳に陰圧

がかかり、耳が詰まるような感覚や痛みが生じた場合に耳抜きをする。耳抜きの一例、鼻をつまみ、息を強く吐き出して耳管を開く。

※3 ダイビングコンピューター…ダイビング中に必要

な情報をリアルタイムで表示し、安全なダイビングをサポートする器材。水深、潜水時間、水温、浮上速度などを表示し、減圧症のリスクを軽減する。

※4 潜水病（減圧症）…体内に溶け込んでいた窒素な

どの不活性ガスが減圧によって気泡化し、組織や血管を傷つけることで発症する障害。潜水後に発症することが多いため「潜水病」とも呼ばれる。

※5 安全停止…安全性を高めるためにダイビング終了

時に水深三〜六メートル、通常は五メートルで、三分間以上行

※6

中性浮力…ダイビング中に水中で浮き沈みもしないバランスの取れた状態のこと。つまり、浮こうとする力（プラス浮力）と沈もうとする力（マイナス浮力）が釣り合っている状態のことである。

う停止。余分な窒素を体内から排出する。また、浮上する海面の安全確認を行うためである。